

5 ジェンダー平等を
実現しよう



女子高校生が感じるジェンダーバイアス
「ジェンダー」に関する女子高校生調査報告書 2019



girl scouts

目次

0

はじめに

- ・「木」を見て「森」も見ろ ― 本冊子の作成にあたって…………… 2
- ・調査の概要…………… 4
- ・調査のねらいと総括…………… 4

1

木を見る―少女たちの声

1. 日常生活にある性差別や暴力…………… 6
2. 社会から受けているメッセージ…………… 10
3. 男女の不公平から生じる社会のありさま…………… 13
 - 👉 少女や女性をめぐる事実…………… 14

2

木と森を一緒に見る

1. 学校生活にあるジェンダーバイアス…………… 18
2. 進学とジェンダーバイアス…………… 21
3. 家庭とジェンダーバイアス…………… 25
4. 日英比較 ― 日英の差はどこからくるのか…………… 27
5. 考察:ジェンダーバイアスを再生産するもの…………… 31

3

健康な「木」と「森」にするために

- ・ジェンダーバイアスがなくなる日を目指して―解決に向けた提案…………… 34
- ・調査報告会 参加者の声…………… 37
- ・発表者の高校生らの声…………… 38

4

あとがき

はじめに

少女は未来の女性。

1975年国際婦人年から44年。

2015年には女性活躍推進法が成立し、

「女性の活躍」のための施策が各方面で見られるようになりました。

未来にわたり、

一人ひとりが可能性を最大限に発揮できる社会となる鍵は、

次世代の女性である少女が握っています。

近年、女性の幸せが多様化する中で、

その少女たちは、どんな期待や不安を抱いているのでしょうか。

ガールスカウトでは「人への役立ち」という価値観を大事にしてきました。

より高度化する社会の中で、より積極的に人への役立ちを果たすため、

近年はアドボカシー活動を推奨しています。

2011年、世界のガールスカウトは「ジェンダーに基づく差別と暴力」を

根絶する取り組みとして、Stop the Violenceキャンペーンを始めました。

このキャンペーンでは、教育プログラムや地域プロジェクトと並び、

調査活動を重視しています。今般の「女子高校生調査2019」は、

この活動の一環としておこなわれました。

日本に先駆けて、イギリスやアメリカ、カナダなどのガールスカウトは、

少女たちが力をつけ、その力を発揮することができる社会を創るために、

少女の声を積極的に聞き、それを社会に届けています。

私たち、日本のガールスカウトも、アドボカシーの一つとして

今回の調査を通して明らかになったことを声に出し、

社会に届けることでよりよい社会を創るための行動を起こします。



「木」を見て「森」も見る – 本冊子の作成にあたって

世界各国の男女平等の度合を示す指数¹があります。この指数は、経済・政治・健康・教育分野における女性割合から算定されており、女性の議員数、管理職に占める女性の割合、男女の賃金格差や高等教育における女性割合などの現状が反映されます。毎年この指数は発表されており、ここ7年ほど日本は100位以下で、2018年は149か国中110位です。

2015年、国連はすべての国の目標として、「持続可能な開発目標²(SDGs)」を採択しました。目標5では「ジェンダー平等を達成し、すべての女性及び女児の能力強化を行なう」とされており、「女性の地位向上」は世界共通の大きなテーマです。各国がジェンダー平等に向けて積極的な取り組みを進める中、日本では「女性の活躍」のための政策はあるものの、その進捗は決して順調とは言えず、大人たちは効果的な解決策を模索しています。この様子は次世代の女性たちである少女たちの目にどう映っているのでしょうか。

今回実施した調査には次の二つの意味があると考えています。

1. 女子高校生が経験する「ジェンダーに基づく差別や暴力」を見える化したこと

今回の調査では、女子高校生たちがジェンダーに関してどのような経験をしているか、どう感じているかが可視化され、進学や就職を考える時期の彼女たちに現代社会がどう映っているかの一端を知ることができました。日本では、高校生のジェンダー意識や価値観についての調査はあまり見当たりません。そのため、この調査は彼女たちの不安や悩みを理解することだけでなく、社会が見えていない部分に光をあてる、という意義があると考えています。

2. 少女の声に焦点をあてたこと

女子教育を長年おこなっているガールスカウトでは、女子の自己肯定感が男子に比べて低いことを課題として認識しており、女子の自己肯定感向上に対する取り組みをおこなってきました。また、2013年に実施した女子教育に関する調査³では、日本で「女子」のデータを入手することの困難さに直面し、女子の現状を把握するためには、男女別にデータを収集・分析することが重要であることを強く感じました。

日本は、データ分析において男女を「区別」しない傾向があり、調査結果では通常男女の平均値が示されます。平均化することは、女子にとって(そして男子にとっても)現状が正確に理解されないだけでなく、適切な施策が施されないことを意味します。

そのため、今回の調査では、少女の声にしっかりと焦点をあて、彼女たちの期待や不安に十分に関心が集まるようにしました。

¹ 世界経済フォーラム、2018、「グローバル・ジェンダー・ギャップ報告書2018」

² 持続可能な開発目標(Sustainable Development Goals:SDGs)とは、2015年9月の国連サミットで採択された「持続可能な開発のための2030アジェンダ」に記載された2016年から2030年までの国際目標のこと。「地球上の誰一人として取り残さない(leave no one behind)」ことを誓って設定された17の目標があり、すべての国の目標である。

³ 公益社団法人ガールスカウト日本連盟、2014、「女の子はもっと伸びる 未来を担う少女たちに今必要なチカラと環境」

今回の女子高校生調査では、オンラインアンケートとグループインタビューを実施しました。オンラインアンケートの詳細は次ページに記載しています。グループインタビューでは、女子高校生たちがアンケート結果に基づいて自分たちの経験や疑問などを話し合いました。本調査の報告会を2019年6月18日衆議院第一議員会館で実施しており、この冊子では、この一連の取り組みを通しての彼女たちの声を紹介します。

「木を見て森を見ず」ということわざがあります。

一部や細かい部分にこだわりすぎると、全体に注意を向けず、物事の本質を把握できないことを指しています。今回の文脈では次のように置き換えられます。

木 = 少女の声

森 = 少女や女性を取り巻く社会の現状やしぐみ

彼女たちの声は、社会の現状を映しています。少女の声を理解することは社会を理解することです。この調査を通して、女子高校生たちは多くのことに「気づいていない」ことがわかりましたが、それは大人においても同じ傾向があるかもしれません。ジェンダーについては問題があまりにも身近なため、今まで語る機会さえなく、知る機会が限定されているという声をガールスカウト内でもよく聞きます。そして、現代社会は非常に多くの要素が複雑に絡み合っており、膨大な情報に囲まれています。

そのため、この冊子では彼女たちの声をより深く理解するために、少女の成長を支える方々と社会を見る視点を共有したいと考え、調査結果のほかに少女・女性たちをめぐるデータなども含めました。

少女たちが日々直面している現状に耳を傾けるミクロの視点と、世の中を俯瞰するマクロな視点の両方を持ち、この冊子を彼女たちが期待や希望が持てる社会とするためにお役立ていただくことを願っています。

● 本調査におけるキーワード

ジェンダー	社会的・文化的な性差。生物学的な性差と対比として使われる。
ジェンダーバイアス	社会的・文化的な性差別あるいは性的偏見。
隠れたカリキュラム	学校には「公式のカリキュラム」として教育する側が明示的に教える内容以外に、学校生活、学校制度、教師の言葉や態度などを通して、子どもたちが学びとっていく規範や価値観、信念などの「隠れたカリキュラム」が存在する。持ち物の色指定、性別の科目や活動、ステレオタイプに基づく声かけの違いなどを通して、子どもたちはいろいろなことを学び合い、影響を受けている。
ダブルスタンダード	同じ状況にも関わらず、対象によって異なる運用基準を設けること。二重基準。

調査の概要

オンラインアンケート

調査対象： 全国44都道府県の女子高校生 15歳～19歳

回答人数： 524人(ガールスカウト会員313人・一般211人)

	15歳	16歳	17歳	18歳	19歳	合計
共学校	90	123	114	42	2	371
女子校	18	67	57	11	0	153

調査方法： インターネット回答 全83問（選択80問・記述3問）

調査期間： 2019年3月23日～4月22日

調査項目はイギリスのガールスカウトが実施したGirls Attitudes Survey 2018を参考にしています。

フォーカスグループ（グループでの意見収集）

高校生 8人 大学生2人

調査のねらいと総括

この調査では、三つのことに焦点をあてました。

- 1点目： 女子高校生たちはジェンダーに基づく差別や暴力をどの程度経験しているのか
- 2点目： 無意識に社会やメディア等から受ける「隠れたメッセージ」や、学校における「隠れたカリキュラム」はどのように存在するのか
- 3点目： イギリスでの同様の調査との比較をおこない、日本の女子高校生の現状を客観的に把握する

調査では62%の女子高校生が、日常生活の中やメディアの中に、女性であるがゆえの差別や暴力を感じ、97%以上が「社会で女性が公平に扱われていないことがある」と感じているという結果が出ました。そして、日常的に受け取る性役割に基づく価値観は彼女らの自信に影響を与え、特に、女性の容姿に対しての社会からのメッセージは、少なからず少女たちの可能性を阻む原因になっていることがうかがえました。

学校教育の中では「男女平等に扱われることは当たり前のことである」と頭では理解していても、自分たちが無意識に「男らしさ」「女らしさ」に縛られていること、また、実際の社会では「男女平等ではないこと」「男女が公平に扱われていないこと」という、いわゆる【二重基準（ダブルスタンダード）】を高校生たちは目にしているということがあぶりだされました。

イギリスとの比較では、回答の中に「わからない」を選択した数がイギリスと比較して8倍にもなった項目がありました。また、差別を感じる割合にも大きな差がありました。これは、イギリスに比べて日本がより平等で公平な社会であることを示しているわけではありません。日本の子どもたちは、メディアリテラシーや、社会に対して関心をもち実態を知るといった機会が不足しているからではないかと推察しています。



1

木を見る—少女たちの声

1. 日常生活にある性差別や暴力
2. 社会から受けているメッセージ
3. 男女の不公平から生じる社会のありさま

 少女や女性をめぐる事実



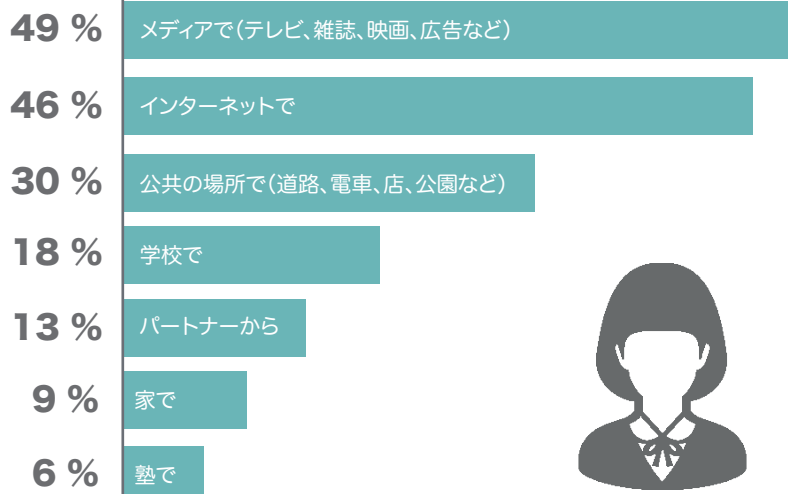
1. 日常生活にある性差別や暴力

女子高校生たちの62%が、普段の生活の中で、何らかの性的な嫌がらせや性差別を経験したり見たりしていることがわかりました。その場面は、メディア(テレビ・雑誌・映画・広告など)、インターネット、公共の場などがあげられます。

普段の生活の次の場面で、性的な嫌がらせや性差別をどのくらい経験したり見たりしますか

62%

普段の生活で性的な嫌がらせや性差別を経験したり見たりする女子高校生



「よくある」「時々ある」「たまにある」の合計
「学校で」は、「教室で」「教室以外の場所で」の平均値



どのようなときに性的な嫌がらせや性差別を経験したか、具体的な場面や内容について、女子高校生たちの声を紹介します。

▶ メディアで(テレビ・雑誌・映画・広告など)

最も多くの声が寄せられたのはメディアで、49%の女子高校生が答えています。詳しく尋ねると、テレビのニュース番組やドラマなどで、女性の役割が「弱い」「若い」「補佐的」というように、限定的に描かれていることが多い、ということを指摘しています。その一方、「私自身も言われないとメディアの違和感に気づかなかった」「日常当たり前になっていて気づかない人の方が多いのではないか」という声もありました。実際には、この数字は49%より多いかもしれません。

WHAT THEY'RE SAYING

“



- ・メディアは女性に対して差別的な表現をすることがある。
- ・番組でデートの場面が出てくるとき、リードするのは基本男性の俳優。女性はいつも受け身な構成。
- ・女性が襲われることを題材にするドラマや映画が多い。
- ・女性が被害者の事件に対して、女性を非難する声、男性を擁護する声上がる。
- ・ちかんされた女性に対して、スカートが短いからなど、女性のせいにするコメントがある。
- ・タレントとかが、胸が強調されるような衣装を着せられている。
- ・テレビには、男性司会者が中心的役割で、女性が補佐的な役割で登場する番組が多い。
- ・ニュース番組で、男性アナウンサーやコメンテーターは年齢が上の人が登場し、女性の人は若い人が多い。
- ・カメラで女性を映す時、足元から顔までゆっくり映したり、短いスカートの足元からのアングルもある。
- ・議員さんなどの、地位や立場を使ったセクハラの記事。
- ・ニュースで見る。
- ・広告で見る。
- ・ドラマで女性が弱い立場として描かれているものがある。
- ・何か事件があった時、被害者女性にも落ち度がある、という報道がされることがある。



▶ インターネットで

メディアに次いで被害の場面にあげられたのは、インターネット(46%)です。高校生にとってSNSは、性別に関係なく自由に発言したりつぶやいたりすることを楽しむ場所になっています。けれども、自分が女性であることを意識させられたり、女性であることで非難や攻撃の対象となることを、彼女たちは息苦しいと感じています。

“



- ・ YouTubeで女性が投稿していたら、ブス、デブなどの誹謗中傷のコメントがたくさんある。
- ・ 女性の体を強調するような画像や広告。
- ・ インターネットの広告欄に、女性が乱暴を受けるなどのマンガやゲームの広告が表示される。
- ・ 性的なマンガの広告が出る。
- ・ 有料〇〇サイトのような、女性を売るようなページ(〇〇は女性関係)。
- ・ SNSで名前やアイコンが女性で、その人が目立ち始めると、リップ(返事)やコメントで性的なことを言われる。女性ということを隠して発言しないといけない。
- ・ ポップアップで性的な広告などが出てくる。
- ・ Twitterでは、アカウントが女性だと分かるとフォロワーが増えたり、メッセージがたくさん届くことがある。
- ・ Twitterの質問箱にはセクハラが多すぎる。
- ・ Twitterで「やりたい」と書かれた。
- ・ Twitterで性差別についてのツイートをよく見る。
- ・ ネットの広告にたまに過激なものが出てきてイラッとする。
- ・ Twitterなどでたまに女性に対して差別的な発言を見たことがある。
- ・ SNSで流れてくる動画。
- ・ SNSで、ラブホテルに行こうと誘われたり、チャットエッチをしたいと言われることがよくある。
- ・ SNSアプリのダイレクトメッセージなどで卑猥な画像を送られる。iPhoneのAirdrop(エアドロップ)で卑猥な画像などが送られる。



▶ 公共の場所で(道路、電車、店、公園など)

電車での痴漢被害のほかに、エスカレーターなどでの盗撮、路上などで体を触られたり、ナンパしてきた人に手の甲をキスされたり、写真を撮られたりするなど、性的嫌がらせを受けた経験を訴える女子高校生がいることがわかりました。また、医療類似行為において体を必要以上に触られたりする、という声もあります。前述したインターネットにおける被害は路上や電車内でも起こっています。

“



- ・ エスカレーターで下から写真を撮られる。
- ・ 盗撮
- ・ 電車の中でのちかん(多数)。
- ・ 電車や人ごみの多いところ。
- ・ 街を歩くとナンパされる。男性はほとんどされない。すごくいや。
- ・ コンビニに男性向け成人雑誌が堂々と置かれている。
- ・ 水着姿の女性が表紙の雑誌が、コンビニなど、誰もが使う場所で売られている。
- ・ 不審者にあつたとき。



▶ 学校で

学校生活で、激しく性的な嫌がらせや差別を受けたという声はあまり寄せられていません。けれども、部活、放課後、休み時間に、先生から「女の子らしく振る舞いなさい」や「女の子なんだから静かにしなさい」という言葉がかけられています。同級生(男女を問わず)や先輩、部活の顧問からも同じような声かけを受けたり、時に体や容姿についてからかわれたりすることもあります。

神奈川県、千葉県等の教育委員会が学校でおこなう「スクールセクハラ」の調査⁴をしています。そこでは、0.04～0.2%の生徒が学校で性差別・セクハラ等を経験したと回答していますが、その調査結果と今回では、被害の割合に大きな差があります。

“



- ・ 中学校の時、「女の子なんだから、自覚を持った振る舞いを～」と集会で先生が注意していました。
- ・ 男女でやることが違う。例えば、体育の授業では男子が柔道や剣道をするのに、女子はダンスをすることになっている。
- ・ 「女の子なんだから静かにしたほうがいいよ」と言われた時。学校の校長先生は大抵男の先生。
- ・ 先生に肩を揉まれる。
- ・ やたらとボディタッチをする先生がいる。
- ・ 部活内(顧問と生徒、生徒とコーチ、生徒同士)。
- ・ 人の少ないところ。放課後や休み時間。
- ・ 女性の身体的特徴について、本人を前に言う。
- ・ 更衣室で着替えるとき。
- ・ 学校で男子が女子の体について話している。
- ・ 先生
- ・ 見た目について学校でいじられる。
- ・ 学校で出席番号が男女別々。
- ・ 先生が特定の生徒に『太ったね』という。
- ・ 何より1番される事の多い差別は名前の呼び方だと思います。男性へは「くん」呼び、女性へは「さん」呼びで差別をしているのではないかと思います。
- ・ 学校で、女子がやりたいと思っていることがあっても、男子がノリで「お前がやれよ」みたいなことを言っていると、やりたくても女子が立候補できない。男子の方が前に出て活躍していることが多い。
- ・ 一部の女子の意見を全く聞いてくれない。意見を聞いてもらえる女子も、自分達に従う子しか意見を聞かないから最終的に男子の一方向的な意見になる。

▶ その他の場所で

性差別や暴力を受けた場面で上位には入っていませんが、パートナーといるとき13%、家庭9%、塾6%という回答もあります。家庭においては、兄弟や親・祖父母から進学や家事で性別に基づいた発言(25ページに関連内容を記載)をあげています。そのほかに、医療機関、友人・知人からも性差別や暴力を受けている声があります。

“

- ・ 塾の先生(男性の方)が、男子生徒には強い口調で言うが、女子生徒には優しい口調な気がする。
- ・ アルバイトで狭いところで必要以上に体を密着させてくる。
- ・ 医療機関(医業類似行為)に受診しに行った時に服の中に手を入れられた。
- ・ 医業類似行為において体を必要以上に触られる。
- ・ 男友達に無理矢理セックスさせられた。

⁴ 神奈川県では高校生13万人から約50件(2018年度)、千葉県では高校生9万人から約150件(2017年度)の被害回答があった。

▶ 女の子だから

場面や状況に関わらず、特に多い意見は、「女の子だから～すべき」と言われることです。無意識のうちに、性別ごとにどうあるべきかという価値観を周りの人から押し付けられ、それに対してほとんどの人が「その価値観を当たり前のことにしてしまっている」という事実がある、と彼女たちは分析しています。

“

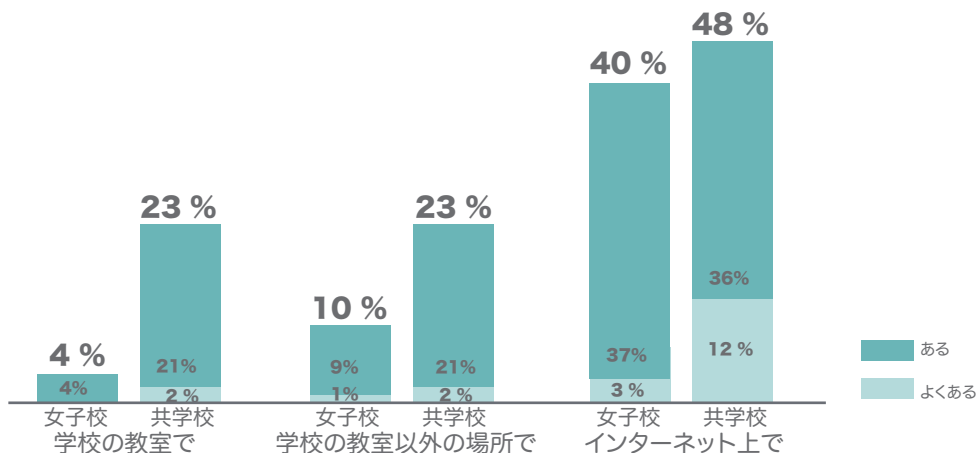


- ・いつも男性が権力が上だったり主な仕事をしている。また、男性だから重いものを運ぶなどもある。
- ・男の人のほうが能力的にたくさん褒められる。
- ・無意識に根付いている男女差別、男子だから、女子だからなどの発言。
- ・男子だから、女子だから、という性差別。
- ・「これだから女は」「女にはわからない」と言われる。
- ・女の子はするな。
- ・女子だからこういるべきだと言われたことがある。
- ・女なのにとかいう人がいる。
- ・女は料理が上手でなければならぬように扱っている。
- ・男子だから力仕事、女子だから料理。
- ・女性はこうあるべきだという固定観念を言っている。
- ・女だから……という表現をされる。
- ・女だから～しないといけないなどよく耳にするから。
- ・「女だからそんなことするな」「それは男がやる遊びだ」「もっと女らしくしろ」などなど。
- ・女だから〇〇しなければいけないと言われる。女性だということにスポットを当てる。
- ・大学の合格率
- ・女子は重いものを持たないで良い。女子には分からない。
- ・女子やのに〇〇してないの?とか。
- ・女性軽視を多く見る。
- ・胸が大きいなどと気にしていることを大声で言われる。
- ・女子であることにスポットを当てる。
- ・セクハラ
- ・性的なことを過剰に聞いてくる。
- ・体を触ったり触らせたりする。
- ・ハグや必要以上の握手の強要。

女子校と共学校の比較

共学校での性的な嫌がらせや性差別を体験する割合は、どの項目においても女子校よりも高くなっています。インターネット上で「よくある」と回答した共学校の生徒は12%で、女子校に比べて高い数値です。

普段の生活の次の場面で、性的な嫌がらせや性差別をどのくらい経験したり見たりしますか



2. 社会から受けているメッセージ

少女や女性に対する扱いについての意見を尋ねました。

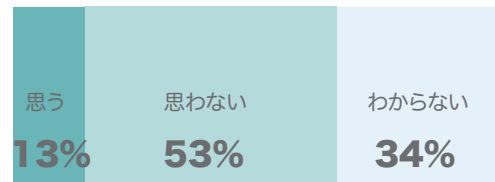
58%が「番組の司会やメインキャスターはほとんどが男性で女性は補佐的な役割をしている」、52%が「成功を収めるために、女性は男性以上に努力しないといけない」と回答し、なかでも特に多かった「容姿をバカにする発言を聞くと嫌になる」では、約80%とほとんどの女子高校生が嫌悪感を抱いていることが分かりました。

また、53%が「メディアは男女を平等に描いていない」と答えました。これは、前項にある「メディア」で性的な嫌がらせや性差別を経験すると答えた人が一番多かったこととも関係していると思われます。

メディアでは、少女・女性と少年・男性は平等に描かれていると思いますか

53%

メディアでは、男女は平等に描かれていない



少女や女性についての次の文についてあなたはどのように思いますか

ブスやデブなど女性の容姿をバカにした発言を聞くと嫌な気持ちがある

79% 7%

番組の司会やメインキャスターはほとんどが男性で、女性は補佐的な役割をしていると思う

58% 27%

成功を収めるために、女性は男性以上に一生懸命に努力しないといけない

52% 35%

女性アナウンサーやタレントのほとんどは、個人の能力ではなく容姿で選ばれている

40% 30%

メディアでは、女性が何かを達成したときの内容より、どんなふうに見えるかを重視しすぎる

37% 16%

性暴力シーンや過激な性描写の載った新聞や漫画などが売られているのは許せない

27% 29%

話題やテーマに関係がないのに、女性が水着や短いスカートを着ているのを見ると嫌な気持ちになる

24% 48%

女性が露出の高い服を着ているのを見ると嫌な気持ちになる

15% 59%

■ そう思う
■ 思わない

このアンケート結果についての意見交換で聞かれた声を以下に紹介します。

WHAT THEY'RE SAYING

“



- ・女性の立場が低い。男性と女性がいると、男性がメインになっている。
- ・SNSでフォロワーが増えたりして身の危険があると、女性だということを隠して発言する必要があると感じる。
- ・大学入試で差をつけられていたように、女性は男性よりも何百倍も努力しないといけないのが日本社会の現状。
- ・同じ出来だと男の人が選ばれるから、認められるために頑張らないといけないし、家事も育児もやらなきゃいけない。
- ・女性は「見た目」、つまり容姿がポイントになっている。
- ・不平等がいっぱいある。もともと歴史的に意思決定は男性がしてきたから？
- ・仕事をするのは男性というイメージがある。男性は大変。
- ・女性と男性が平等な評価をされていない。
- ・テレビ番組で、男性は知識で選ばれて出ているが、女性は容姿も選ばれる基準になっている。女性は容姿が悪いと仕事ももらえないみたい。
- ・クイズ番組などで、(女性は)一般人でも容姿と学力の両方を備えていないといけない。
- ・かわいくないと叩かれるのはおかしい。
- ・かわいいが大前提。
- ・男性は客観的な事実で選ばれている。

テレビ番組での男女の役割から受け取るメッセージについて、次のような意見があります。

“

- ・ニュースやバラエティ番組などで、司会者が男性ばかりで、女性アナウンサーや女優は容姿を重視されがち。
- ・特に、女性アナウンサーは若い人が多いので、女性には「若さ」求められていると感じる。
- ・女性の方が出産や結婚での退職や、若さが重視されるから、実力を伸ばす時間が限られる。だから司会などの重要役職につかせてもらえないのかな。



テレビなどで伝えられる「隠れたメッセージ」により、自分たちを型にはめ、「理想の女の子を演じる」「周りの目を気にして行動する」「女性の生き方の現状のイメージにとられる」という傾向が垣間見れます。そして、それがうまくいかない場合「発言や行動を控える」「あきらめる」「がんばらない」「無難な生き方をえらぶ」という方向に進む傾向もあるようです。

“

可愛さは、1つしかない。代表的な可愛さはアイドルや俳優といったメディアで活躍する人々で、女子はそれに憧れを抱き目指すという傾向がある。その可愛さから外れている人をけなすようなメッセージもたくさん発信されている。それが過度なダイエットや、自信が持てないことなどに繋がることもたくさんある。女の子が容姿に執着してしまう状態を作り上げてしまっている原因は、社会の中に女性の方が容姿で評価される傾向があるから。



“

いろんなことに成功している人は、容姿ではなく、その人の自信のせいって言った人がいる。自信があるからいろんなことに挑戦する。成功するともっと自信がついていくから、また挑戦できる。でも多くの女の子たちは、自分の容姿について、メディアが発信していることに影響を受け、こうでなきゃいけないという枠に自分を押し込める。そんな風には現実はいかないから、自信が持てなくなり、いろいろなことに挑戦できないことにつながり、挑戦できないともっと自信を持てなくなるというマイナスの循環になっていると思う。

WHAT THEY'RE SAYING



“

「女性は家事ができる」「オシャレをする」「結婚し、子どもを産む」「子育てをする」などの、こうあるべきという固定観念が強いために、大人になると、化粧をするのが当たり前であり、女性のたしなみとされていたり、家事ができて、可愛くて、優しいという感じの理想の女の子を演じているのだと思います。

“

例えば、大学生や社会人になると、女性は化粧をしなければ非常識だという風潮がある。高校生の今は化粧をしなくていいし、なかには校則で禁止されている学校もあるのに、なぜ、高校を卒業したとたん化粧をする必要性があるのかと思う。周囲の友達に聞くと、みんな口をそろえて「男の人はしなくてもいいのに、なぜ女の子はしなければ非常識だと言われなければならないのか」と言っていた。

“

こうあるべきという固定観念は、当たり前になりすぎていて、気づかないことばかり。

“

結婚や妊娠、子育てなどの将来のことをイメージすると、やりたい事をやり続ける事に難しさを感じたり、周りからうとまれたくないという理由で、発言や行動を控えていたり、無難な生き方を選びがちになってしまうというのも現状。



「わからない」

一方、「わからない」を選択した女子高校生が多くいました。約半数が「わからない」と回答をしている質問もあります。「わからない」理由については、27-29ページで考えます。

少女や女性についての次の文についてあなたはどのように思いますか

メディアでは、女性が何かを達成した時の内容よりも、どんなふうに見えるかを重視しすぎる

47 %

暴力シーンや過激な性描写の載った新聞・雑誌や漫画などが売られているのは許せない

44 %

メディアでは、少女・女性と少年・男性とは平等に描かれている

34 %

女性アナウンサーやタレントのほとんどは、個人の能力ではなく容姿で選ばれている

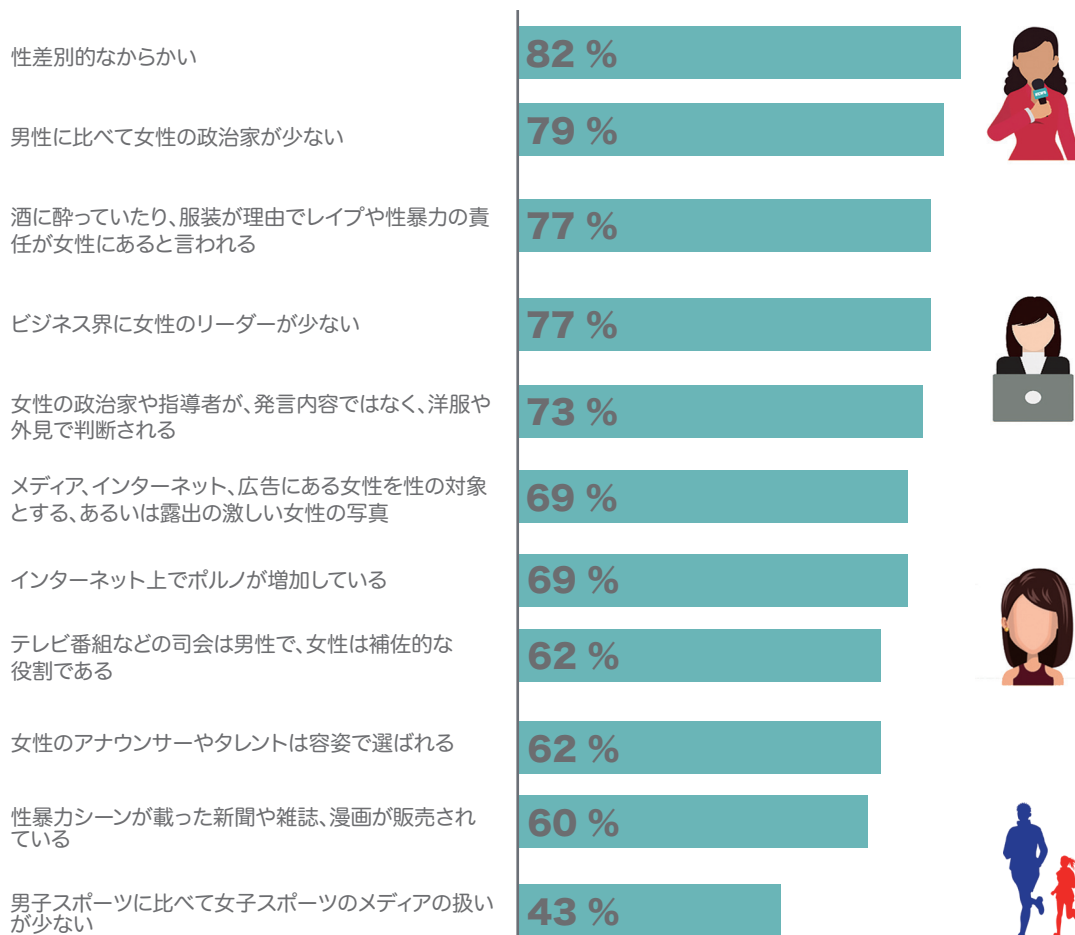
29 %

わからないと回答した割合

3. 男女の不公平から生じる社会のありさま

世の中には、少女・女性と少年・男性とを公平に扱っていないと判断される場面があります。次のような状況・場面が、男女の扱いが公平でないことに関係しているかを聞きました。

男性に比べて少女や女性の扱いが公平でないことに、次のことはどの程度関係していると思いますか



「とても関係している」「まあまあ関係している」と回答した割合

93%

上記の項目が「男女が不公平であることと関係がある」と回答した女子高校生

上記の11項目のいずれか、あるいはすべてが「男女が不公平であることと関係がある」と回答した女子高校生は93%に上ります。

このことから、社会では男女が不公平である、という認識が彼女たちの中に、広くあることがわかります。



少女や女性をめぐる事実

少女や女性を取り巻く数字のクイズに挑戦してみましょう。 解答は16ページにあります。

1 2017年10月の衆議院議員総選挙を経て、2019年1月現在では女性議員は10.2% (47人)となりました。これは国際比較すると、193か国中日本は何位ですか。

- ① 80位 ② 110位 ③ 162位

出典:列国議会同盟(Inter-Parliamentary Union, IPU)、「Women in Parliaments」(2018年12月1日時点)

2 普段目にする新聞やラジオ、テレビニュースなどで、ジェンダー平等に関する話題は、世界平均でどの程度扱われているでしょうか。

- ① 9% ② 19% ③ 29%

出典:Institute for Future Media & Journalism, 'Global Media Monitoring Project 2015'

3 6か月以上の育児休暇を取得した日本の父親は20人に1人(2017年)でした。では、日本で父親に認められている育児休業の期間は41か国中何位でしょうか。

- ① 1位 ② 10位 ③ 20位

出典:ユニセフ(国際連合児童基金)、2019、報告書「先進国における家族にやさしい政策」

4 フルタイムで働く男性の賃金を100とした場合、女性の賃金はどの程度でしょうか。

- ① 63.4 ② 73.3 ③ 83.4

出典:内閣府、「男女共同参画白書令和元年度版」

5 2018年5月に「政治分野における男女共同参画推進法」が施行され、男女の候補者の数ができる限り均等(50%)となることを目指すことになりました。2019年7月の参議院議員選挙での推進法の目標をクリアした政党はいくつあったでしょうか。

- ① 0 ② 2 ③ 5

2019年7月の参議院議員選挙関連資料より作成

6 2019年にフランスで開催された女子サッカーのワールドカップの優勝国アメリカは、優勝賞金400万ドル(約4億3400万円)を手にしましたが、2018年にロシア開催の男子サッカーで優勝国フランスが得た賞金は、2019年女子の何倍だったでしょうか。

- ① 約2倍の850万ドル(約9億2180万円)
② 約5倍の2100万ドル(約22億7750万円)
③ 約10倍の3800万ドル(約41億2100万円)

フォーブスジャパンおよびBBCより作成

●印のあるものは第2章以降にも出てきます。

7 自分がICT・AI・ロボティクス技術が普及・発達する社会に出て働くことについての意識を高校生に尋ねたところ、「好ましい」と答えた女子は65%で、男子より15ポイント低く、女子の方が不安を感じていることがわかりました。「好ましくない」と答えた理由のうち、女子が最も危惧しているのはどれだと思いますか。

- ① 人間の仕事がなくなり就職難になりそうだから
- ② ICTやコンピューターが苦手だから
- ③ 就きたいと思っている仕事・興味がある仕事
がなくなりそうだから

出典：株式会社リクルートマーケティングパートナーズ、
「高校生価値意識調査2018『現在の幸福感和将来のイメージ』」

8 10歳女子で、「女子は男子よりも料理が上手にできた方がいいと思う」と考えているのはどれぐらいいるのでしょうか。

- ① 45%
- ② 65%
- ③ 85%

出典：株式会社ワコール、「ワコールキラキラ白書2019年版」

9 OECD国際教員指導環境調査では、教師の男女の割合が均等でないことは、さまざまなことに影響するといわれています。次のうち影響があるものはどれですか。

- ① 女子生徒の学習成果(成績)
- ② 職場での男女平等の実現
- ③ 将来の希望(キャリア願望)
- ④ すべて

出典：OECD、「TALIS 2018 Results (Volume I) - Teachers and School Leaders as Lifelong Learners」
百合田真樹人ほか、2018、「学校教育の組織における社会的・文化的に形成された性に基づく格差とその課題」(独立行政法人教職員支援機構)

10 平成28年度の世論調査で、「男女の地位が最も平等である」と感じている割合が高いのは、次のどの分野でしょうか。

- ① 家庭生活
- ② 職場
- ③ 学校教育
- ④ 政治の場
- ⑤ 法律や制度上
- ⑥ 社会通念・慣習・しきたり
- ⑦ 自治会やPTA

出典：内閣府、2016、「男女共同参画社会に関する世論調査」

11 11大学の教員養成課程に在籍する学生に、ジェンダーに関する概念について説明できるかどうかを尋ねました。「隠れたカリキュラム」について「説明できる」と回答した割合はどれぐらいだったでしょうか。

- ① 62.8%
- ② 40.9%
- ③ 16.0%

出典：寺町晋哉、「教員養成課程におけるジェンダーの視点導入の課題：学生の履修状況と「ジェンダーと教育」に対する認識から」、大阪大学教育学年報、17 P.59-P.72、2012

12 日本・米国・中国・韓国の高校生に実施した調査で、日本の女子高校生が日本の男子高校生に比べて肯定的な回答をしている割合が10ポイント低い質問がありました。それはどの質問でしょうか。

- ① 今の生活環境を変えたい
- ② 今の自分が好きだ
- ③ 将来への希望をもっている

出典：独立行政法人国立青少年教育振興機構、2019、「高校生の留学に関する意識調査報告書—日本・米国・中国・韓国の比較—」



少女や女性をめぐる事実(14・15ページ)関連データ

QRコードを読み取ると詳細な情報を読むことができます。

1



③ 162位

世界の女性国会議員比率は1995年の11.3%から、2019年1月には24.3%まで上昇。

2



① 9%

世界130か国の報道におけるジェンダー平等についてのグローバル調査 (Global Media Monitoring Project 2015)では、世界人口の50%は女性であるにも関わらず、女性が登場するニュースは24%、女性が伝えているのは37%であると報告。また、ジェンダー平等について扱っている話題はわずか9%、ジェンダーのステレオタイプに明確に異議を唱えているのは4%に過ぎないと指摘している。

3



① 1位

ユニセフ(国際連合児童基金)は、報告書「先進国における家族にやさしい政策」の中で、「家族にやさしい政策」を基準に順位づけし、多くの父親が有給育児休業制度を取得できていない実情もあきらかにしている。

日本は、父親に認められている育児休業の期間が、41か国中第1位(最も期間が長い国)で、父親に6カ月以上の(全額支給換算)有給育児休業期間を設けた制度を整備している唯一の国。しかし、2017年に取得した父親は20人に1人で、2番目に長い父親の育児休業制度を有する韓国でも、実際に取得した父親は育児休業を取得した親全体の6人に1人と大きな格差がある。

4



② 73.3

一般労働者における男女の所定内給与額の格差は、2018年の男性一般労働者の給与水準を100としたときの女性一般労働者の給与水準は73.3。

5



② 2

2019年7月の参議院議員選挙において、女性立候補予定者は全体334人のうち29%(98人)で、3年前より4ポイント高くなった。政党別には、自民党15%(12人)、立憲民主党45%(19人)、国民民主党37%(10人)、公明党15%(2人)、共産党55%(22人)、日本維新の会25%(5人)、社民党71%(5人)。

6



③約10倍

2018年男子W杯優勝賞金3800万ドル(約41億2100万円)は、2019年女子W杯(24か国参加)の賞金総額3000万ドル(約32億6000万円)より多い。

こういったFIFAの決定や男子より所得が低いことなどに異議を唱える声が高まっている。アメリカでは女子チームが賞金問題をめぐり、同国のサッカー連盟を提訴、オーストラリアの選手会はFIFAに対し、男子と女子に平等な報酬を与えるよう求めた。

一方、ニュージーランドでは2018年に、男女の同国代表選手に平等の報酬と賞金が支払われることが決まったほか、ノルウェーでも2017年から同国代表選手には男女問わず同額が支払われている。

7



①人間の仕事がなく なり就職難になりそう

ICT・AIが普及した社会で「自分が働くこと」について、人間の仕事がなく就職難になりそう(女子74.4%、男子62.1%)、今、就きたいと思っている仕事・興味がある仕事がなくなりそう(女子42%、男子44.6%)、ICTやコンピューターが苦手だから(女子13.8%、男子9.7%)。

この調査では「人生が100歳まで長くなること」についても聞いており、「好ましい」と回答した男子は50%、女子40%と開きがある。

8



③85%

「女子は男子よりも料理が上手にできた方がいい」という回答は8割以上、「丁寧な言葉遣いの方が良い」が、7割以上。(26ページ参照)

9



④すべて

女性校長・教員が増えることは、学校のあらゆる面でジェンダー格差是正につながる。(20ページ参照)

10



③ 学校教育

男女平等と感じている割合はそれぞれ、家庭生活47%、職場30%、学校教育66%、政治の場19%、法律や制度上41%、社会通念・慣習・しきたり22%、自治会やPTA47%となっており、学校教育を男女平等の場として意識している割合が高い。

11



③ 16.0%

ジェンダーに関する概念について「説明できる」と答えた割合は、上位からセクシュアル・ハラスメント(86.1)、ジェンダー(67.1)、G.I.D(性同一性障害)(62.8)となり、男女共同参画社会基本法(42.0)や家父長制(45.8)、性別役割分業(40.9)は5割を切り、隠れたカリキュラムは16.0となっている。(数値は%)

12



② 今の自分が 好きだ

「今の自分が好きだ」という質問では、「そう思う」の回答割合が日本48%、米国81%、中国70%、韓国74%と日本が顕著に低い。この質問の男女差を見ると、米中韓どの国も男子より女子が2-5ポイント低いが、日本の場合10ポイント低い。

「今の生活環境を変えたい」には男女差はなく、「将来への希望をもっている」は、米国91%、中国88%、韓国74%に対して、日本65%と大きな違いがあるが、日本の男女間では女子の方が男子より3ポイント高い。

「私は他の人々に劣らず価値のある人間である」「自分はダメな人間だと思うことがある」という質問においても、自分を肯定的にとらえる女子が男子より10ポイント程度低い。



2

木と森を一緒に見る

1. 学校生活にあるジェンダーバイアス
2. 進学とジェンダーバイアス
3. 家庭とジェンダーバイアス
4. 日英比較 - 日英の差はどこからくるのか
5. 考察:ジェンダーバイアスを再生産するもの



1. 学校生活にあるジェンダーバイアス

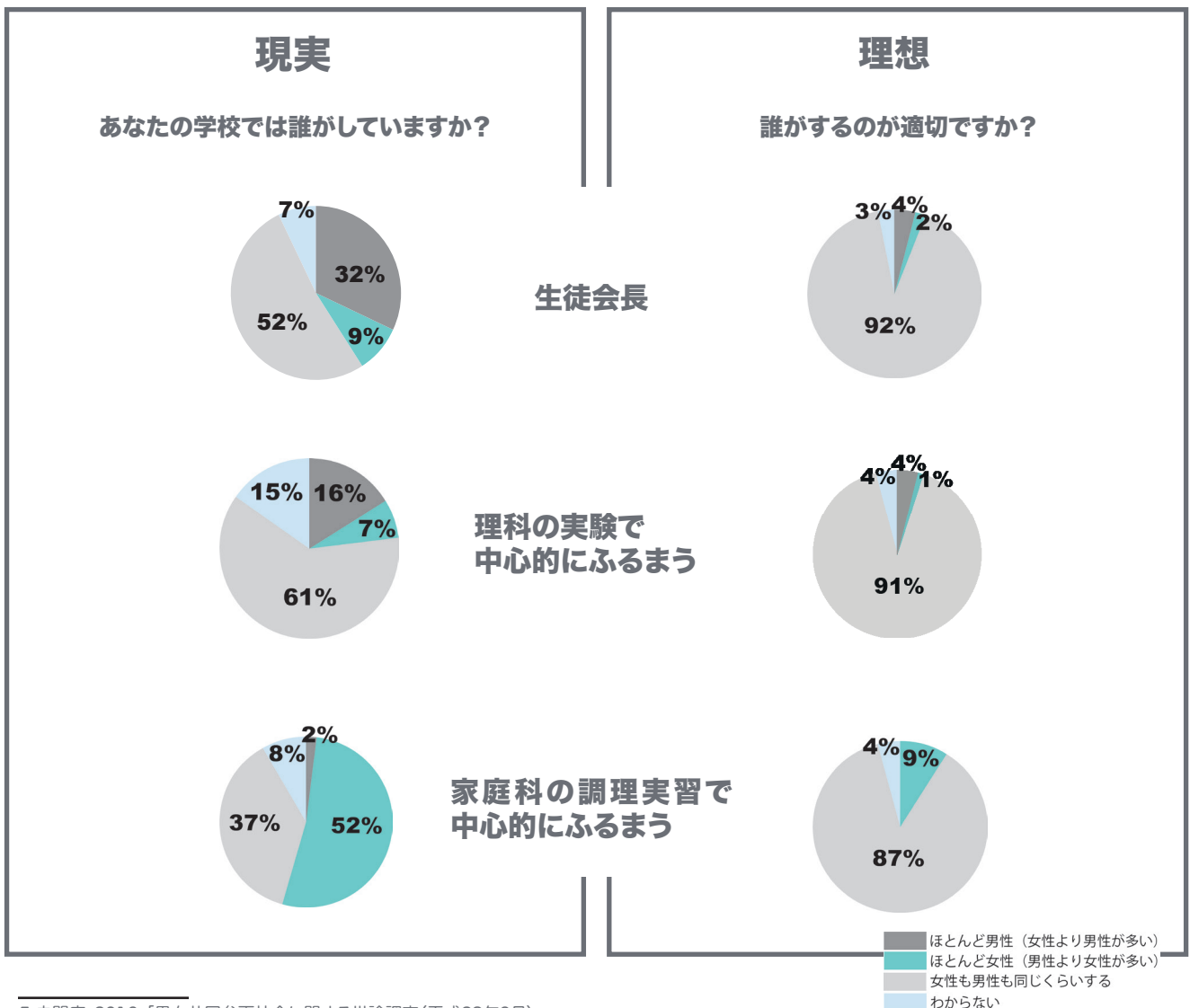
66%の人が学校教育の場においては「男女平等」と考えています⁵。

女子も男子と同じように教育を受ける機会が与えられているため、「機会均等」の視点から、そのように判断する人が多いと考えられます。では、現在学校に通う少女たちは、その学校でどんな風に男女平等を経験しているかを取り上げました。

【現実】と【理想】の差

共学校では、生徒会長は主に男子生徒がおこなっているという答えが3分の1程度あり、調理実習は半数が女子が中心におこなっていると回答しました。理科の実験では、男女どちらもが6割を超えるものの、16%が男子が中心と答えました。一方「誰がするのが適切か」という理想を問うと、男女関係なく役割を担うという回答がどの質問も9割前後を占め、現実との間に差が見られます。

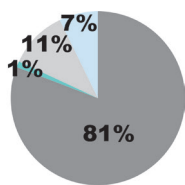
生徒会長の現実の数字では、52%は男女どちらもおこなう、と答えています。この結果について「リーダーになりたいと思う女の子がこんなにもいる」という意見がありました。これはこんなに「も」とみるか、これだけ「しか」とみるかで、現状認識がかなり違ってきます。理想は90%以上が男女どちらも、と答えており、現実には女子生徒会長が少ない理由の背景を考える必要があります。また、調理実習に関しては理想においても女子の役割という回答は生徒会長や理科の実験より多く、これは少女自身が性役割意識に縛られているということを示しているとも言えます。



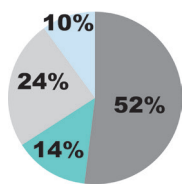
⁵ 内閣府、2016、「男女共同参画社会に関する世論調査(平成28年9月)」

共学校では男性校長が7割以上を占める一方、女子校では女性校長は14%、男女どちらも24%と、女性校長が一定数存在します。共学校・女子校を問わず、9割近くが「校長は男女どちらでも」と回答する少女たちにとって、自分たちの学校のリーダーの性別は少女たちの価値観にどのような影響を与えるのでしょうか。

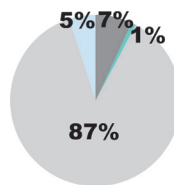
現実 共学校



女子校



理想



校長先生

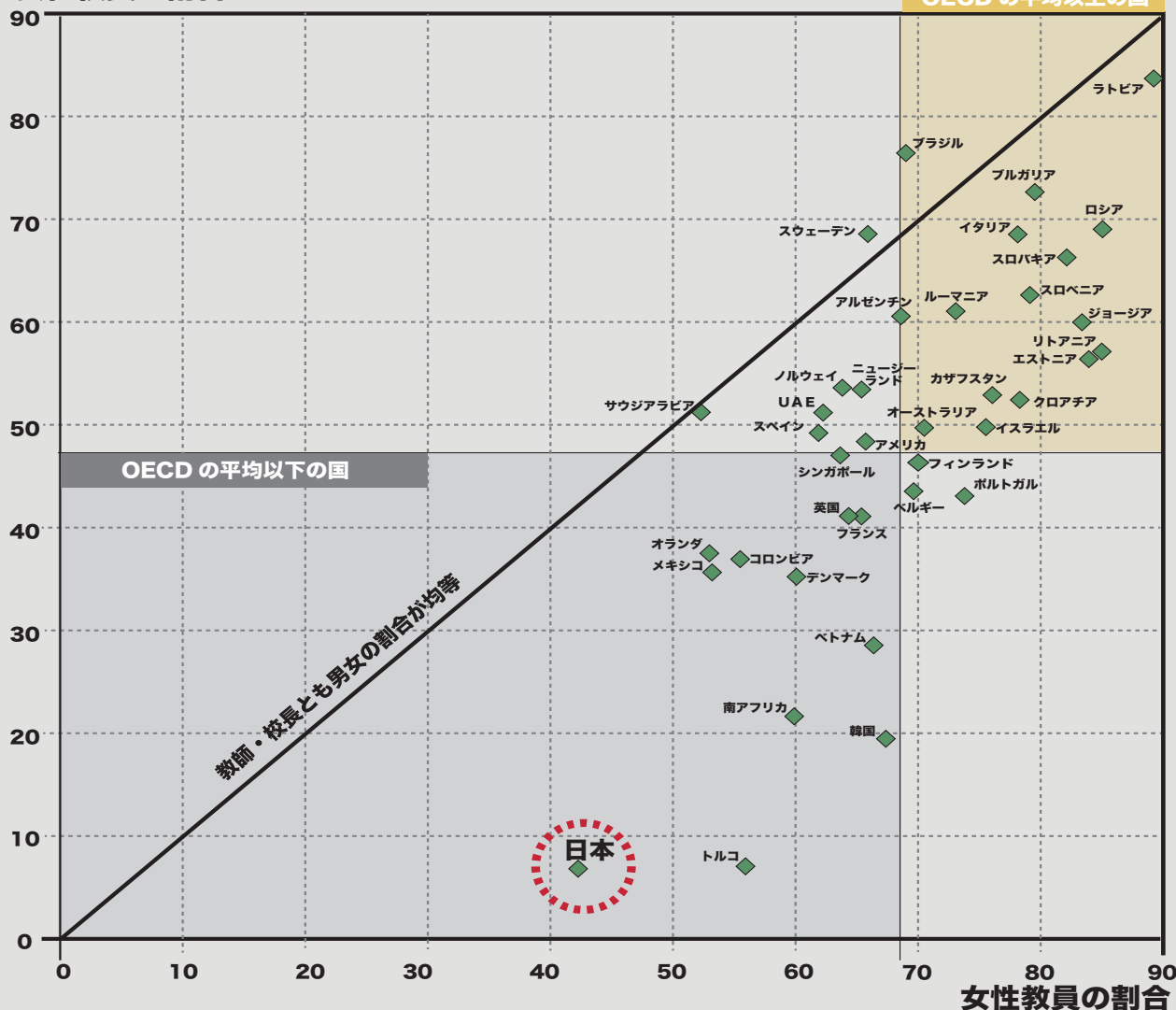
ほとんど男性 (女性より男性が多い)
 ほとんど女性 (男性より女性が多い)
 女性も男性も同じくらい
 わからない

資料

■ 日本の女性教員・女性校長は国際的にとても少ない

- 国際教員指導環境調査⁶によると、日本の中学校の女性校長の割合は7%。
- 女性教員の割合は 42.2%で、5割以下であるのは日本のみ。これに対して、調査参加48カ国中の平均は、女性校長の割合が 48.9%、女性教員の割合が 69.2%。
- 小学校では、女性教員の割合は 61.4%で中学校よりは多いが、参加国中最も低い割合。
- 小学校の女性校長の割合は 23.1%で中学校よりは高いが、これは参加国中2番目に低い。

女性校長の割合



6 国立教育政策研究所、2019、「OECD国際教員指導環境調査 (TALIS) 2018年報告書ー学び続ける教員と校長ー」

▶ 資料

■ 女性校長は女子生徒のロールモデル

- 前述の国際教員指導環境調査(英語版)⁷では、学校に女性管理職が存在すると、女子児童生徒に肯定的ロールモデルを示し、肯定的な教育効果が確認されているほか、女子の成績やキャリア願望等にも効果があると報告されている。また、教師のキャリア形成におけるジェンダー格差是正にも影響を与えると報告されている。
- 教職員支援機構の報告⁸によると、日本では、教員養成段階でジェンダー関連科目の履修経験をもつ教員候補者は35.4%であり、ジェンダーの科目を履修していても、「隠れたカリキュラム」の概念を説明できる教員候補者は、同科目受講経験者の16%に過ぎない。また、教員養成機関で教員候補者を教育する教師教育者もつジェンダー観などの価値観が、教育実践を介して伝達され、再生産されるというエビデンスを紹介し、教員の養成と研修のカリキュラムの検討はもとより、教員の採用や昇任などの人材配置においてジェンダーを始めとした社会的多様性に公正で責任ある教員組織のあり方を意識的に検討する必要があると述べている。

■ 女性教師が管理職にならない理由

- 国立女性教育会館が実施した調査⁹によると、将来、管理職に「ぜひなりたい」「できればなりたい」と回答した教員の割合は、女性7.0%、男性29.0%と大きな開きがあった。「なりたくない理由」として割合が高いのは、女性は、家事や育児等の家庭生活との両立の困難や力量不足であるという自己評価を示す項目。子どもが未就学から小学校の時期に、女性教員の79.4%は家事・育児等の半分以上を担っている(た)のに対して、男性教員では3.5%。
- 25.7%の教員が「男性の方が女性より管理職に向いていると思う」と回答し、49.0%の教員が「家事・育児は女性の方が向いていると思う」と回答している。

7 OECD, 2019, 'TALIS 2018 Results (Volume I) - Teachers and School Leaders as Lifelong Learners'

8 百合田真樹人、2019、「優れた教員の量的確保に向けたわが国の課題と諸外国に於ける施策と根拠」(独立行政法人教職員支援機構)

9 独立行政法人国立女性教育会館、2018、「学校教員のキャリアと生活に関する調査」

2. 進学とジェンダーバイアス

女子の4年制大学進学率は50.7%¹⁰で、長期的には上昇傾向にありますが、男性に比べると6.8ポイント低くなっています。学部別の女子学生数の割合を見ると、理学28%、工学15%となっており、大きな偏りがあります(23ページ)。

なぜ女子の進学率は低いのでしょうか。なぜ女子は理数系を選択しないのでしょうか。

この背景を知るために、少女たちがどのようなメッセージを受け取っているかを尋ねました。

「女の子は4年制大学に行かなくてよい」とは言われたい

90% 「女の子は4年制大学に行かなくてよい」とは言われたことはない

93% 「女の子は数学や理科ができなくてよい」とは言われたことはない

「女の子は4年制大学に行かなくてよい」と言われたことはあるかという質問に対し、女子高校生の90%は「言われたことはない」と答えています。しかしながら、4年制大学進学率には男女差があり、23ページのように多くの地域で差があります。実際、アンケートでも「行かなくてよい」と言われた少女は、比較すると都市部より地方の方が多くなっています。

「女の子は4年制大学に行かなくてよい」と誰が一番言われますか

- 5% わからない
- 2% 母親
- 1% 父親
- 1% 学校の先生
- 0.38% 女友達
- 0% 男友達

言われたことがない

90%

実生活の経験と社会の現状に差がある理由を尋ねたところ、次のような答えが返ってきました。

“

- ・短大に行くのは女性というイメージ。
- ・短大の学科は福祉系で、女子が多いからそう思うのかもしれない。
- ・都内と地方など、育ってきた環境の違いが影響している。
- ・古風な考えが根付いていたり、ステレオタイプがあったり。
- ・ライフイベント(結婚や出産等)を考えて、なるべく早く働きたいのかも。

“

今まで、大学に行かなくていい、なんていわれることあるのかな、って思っていたけど、地方に行くと、そういうこともあるって初めて知った。

“

世界の国(23ページ)と比べると、女子の方が大学に行く割合が高い国もあり、自分が気付かないところに差があるのだと知りました。



10 文部科学省、2019、「学校基本調査(令和元年度速報)」

理数系を選択しない背景

4年制大学進学と同様、大多数の女子高校生は「理科や数学を勉強することについて、否定的なことを言われることはない」と回答しています。それでは少女が理数系を専攻することを阻んでいるものは何でしょうか。

学校の環境について質問してみると、以下のような異なる経験が聞こえてきます。

“

- ・ 数学や理科の先生って、ほとんどが男性のイメージ。
- ・ 私の学校では、理数系クラスの男女の割合は、男子7で女子が3ぐらい。理科の先生は男ばかり。数学は女の先生が1人。
- ・ 私の学校では、理数系でも男女は同じぐらいいる。先生にも女性の先生がいる。男女の理数系進学にはあまり差はない。

女子高校生が理数系を選択しない理由についても尋ねてみました。

“



- ・ 理数系は、入りにくい男性コミュニティ、っていうイメージ。
- ・ 男性の学問だ、というステレオタイプがある。
- ・ 将来どんな仕事につくかのイメージがつきづらい。
- ・ 実際に理数系を専攻して働いている女性の仕事内容がわかりにくい。
- ・ リケジョが取り沙汰されているものの、実際どのような職があるか知らない。
- ・ 研究職イメージがあまりにも強すぎる。
- ・ できれば、高校生よりもっと早い段階で、そういう情報があれば、理数系を選ぶ女子はもっと増えるかも。
- ・ う〜ん、でも、よくはわからない…。

4年制大学進学や理数系専攻について、否定的なことを言われることは少ないとはいうものの、「学校の先生」や「父母」から言われたと答える女子高校生がいます。また、今回の選択肢になかった「祖父母」をあげているものも複数見られました。

“

- ・ (回答の) 選択肢にはなかった、「祖父母から言われる」ことが多いです。
- ・ 母や祖母には男女によって行く学校や進路のことに対する固定観念があり、それをよく話している。
- ・ 男の子だから私立のいい学校に、など、男女によって行く学校や進路のことに対する固定観念があり、それをよく母や祖母が話している。

▶ 資料

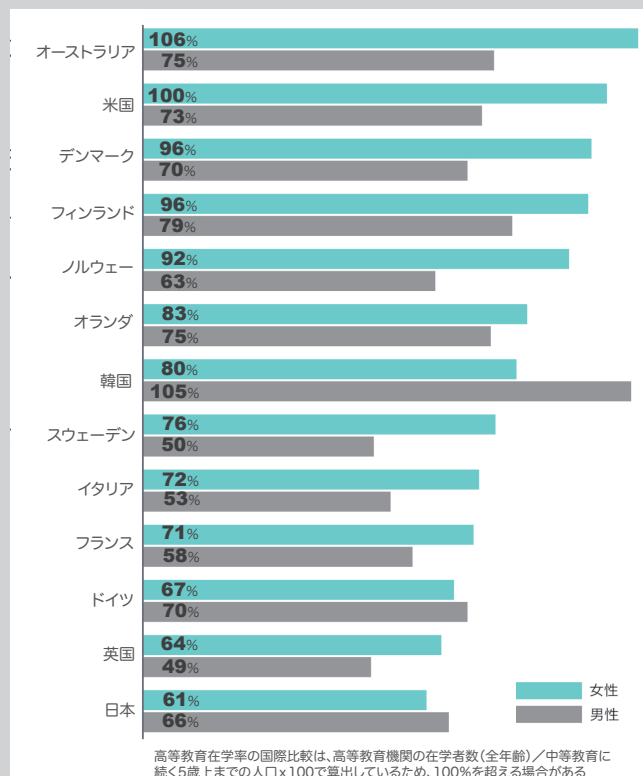
■都道府県によって異なる4年制大学進学率¹¹

	男	女	平均	男女差
北海道	50.85	38.87	45.00	11.98
青森県	43.24	38.51	40.91	4.73
岩手県	39.41	37.58	38.52	1.83
宮城県	48.81	44.18	46.58	4.63
秋田県	40.87	38.06	39.50	2.81
山形県	41.20	37.76	39.53	3.44
福島県	43.13	35.93	39.63	7.20
茨城県	54.92	49.21	52.14	5.71
栃木県	52.45	45.22	48.95	7.23
群馬県	48.94	44.03	46.55	4.91
埼玉県	57.58	46.90	52.41	10.68
千葉県	57.64	49.63	53.75	8.01
東京都	72.18	73.17	72.67	-0.99
神奈川県	58.72	51.69	55.28	7.03
新潟県	46.16	38.96	42.69	7.20
富山県	47.28	42.67	45.00	4.61
石川県	54.09	48.18	51.23	5.91
福井県	54.58	48.27	51.49	6.31
山梨県	68.74	53.00	60.99	15.74
長野県	47.55	40.05	43.91	7.50
岐阜県	50.50	42.92	46.81	7.58
静岡県	52.76	44.18	48.57	8.58
愛知県	56.31	50.02	53.25	6.29
三重県	47.25	41.13	44.25	6.12

	男	女	平均	男女差
滋賀県	52.33	43.29	47.90	9.04
京都府	67.76	63.16	65.49	4.60
大阪府	60.46	51.84	56.23	8.62
兵庫県	56.51	54.70	55.62	1.81
奈良県	62.89	53.98	58.59	8.91
和歌山県	48.74	39.37	44.06	9.37
鳥取県	42.00	37.99	40.07	4.01
島根県	46.46	40.50	43.51	5.96
岡山県	49.20	47.46	48.35	1.74
広島県	56.89	53.39	55.18	3.50
山口県	40.94	38.22	39.62	2.72
徳島県	45.26	47.26	46.23	-2.00
香川県	51.90	47.96	49.90	3.94
愛媛県	50.40	44.36	47.40	6.04
高知県	43.95	41.40	42.73	2.55
福岡県	50.34	45.41	47.93	4.93
佐賀県	42.73	37.48	40.19	5.25
長崎県	41.46	38.19	39.85	3.27
熊本県	44.84	40.44	42.69	4.40
大分県	40.99	35.84	38.46	5.15
宮崎県	41.85	36.07	39.03	5.78
鹿児島県	43.44	34.11	38.85	9.33
沖縄県	38.63	36.60	37.65	2.03
全国	56.31	50.14	53.30	6.17

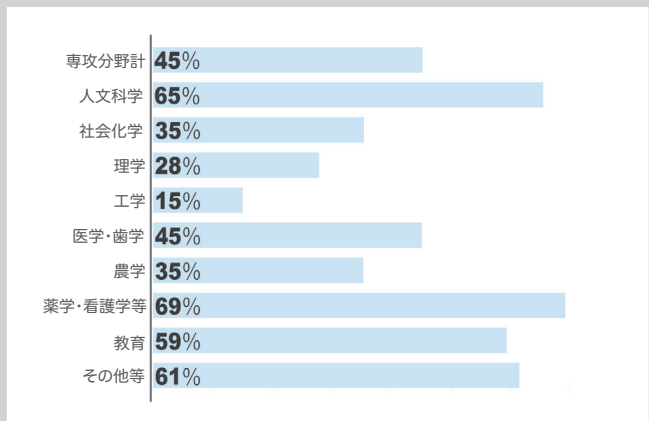
■高等教育在学率の国際比較¹²

- 日本の女性の高等教育在学率は、他の先進国と比較して低い水準になっている。
- 多くの国では、男性より女性の在学率が高くなっているが、日本、韓国及びドイツでは男性より女性の在学率が低くなっている。



■学部生に占める女子学生の割合¹¹

- 学部生の専攻分野で見ると、人文科学、薬学・看護学・教育等では女子学生の割合が高いが、理学や工学では女子学生の割合は著しく低い。専攻分野によって男女の偏りが見られる。



11 文部科学省、2018、「学校基本調査(平成30年度)」

12 内閣府、2018、「男女共同参画白書(平成30年度)」

▶ 資料

■ 理数系の力に男女差はない

- 15歳時点で実施される国際学習到達度調査¹³によると、数学の成績は女子の方が男子より悪く、一般に、数学や理数系の問題を解く能力に対する自信は女子の方が低く、数学に対する不安が強い生徒の比率も、女子の方が高い。しかし、数学に対する自信と数学に対する不安が同じ程度の男子と女子を比較すると、成績の男女差はなくなる。また女子は、出題傾向によって成績に差が出るということが報告されている。
- 生徒の不安や教え方、生徒に対する期待など、さまざまな要素を検討した結果、OECDは、「学業成績の男女格差は生まれつきの能力差によるものではなく、環境要因が影響している」と説明している。
- 日本の女子中学生の数学や理科系科目の成績は、諸外国の女子及び男子よりも高い得点¹⁴であるが、日本の男子中学生と比べると点数は低い。一方で読解では女子の方が男子を大幅に上回っており、それと比べると理数系の差は決して大きな差ではない。

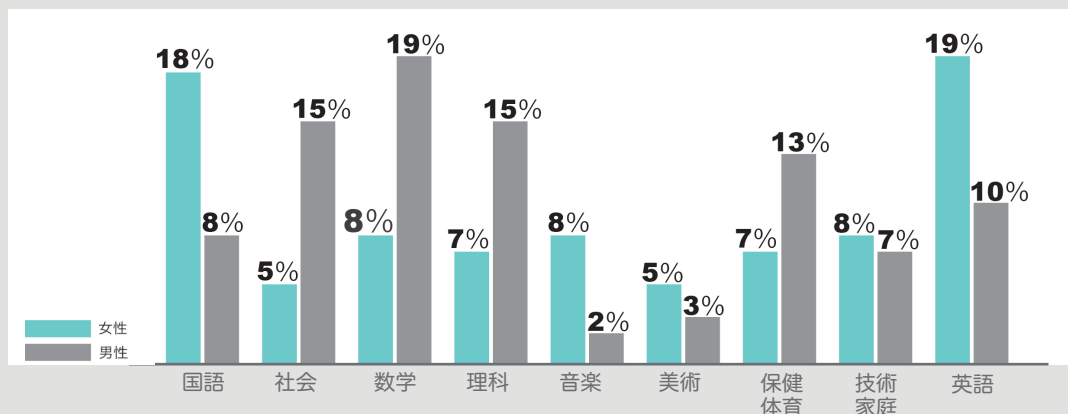
■ 好きな教科の男女の違い¹⁵

- 自分を「理数系タイプ」あるいは「どちらかといえば理数系タイプ」とする女子は27%、自身を「文系タイプ」「どちらかといえば文系タイプ」と回答した女子は41%で、男子に比べて「文系」と回答する割合が高い。
- 小学生女子の好きな科目は英語、理科、国語、算数の順で、国語より理科が好きな児童が多い。3位の国語と4位の算数の差はわずか。一方、中学生になると5教科中、数学は4位、理科は5位となる。

■ 教科ごとの教員の男女比¹⁵

- 教科別に女性教員の割合を見ると、中学校では国語や英語で女性教員が多く、数学や理科、社会では男性教員が多い。
- 高等学校においても、文系に女性教員が多く、理数系や社会科に男性教員が多い。これは好きな科目の男女の傾向と一致している。

担任教科別・教員免許状別教員構成(中学校)



■ 「男子の方が理数系の能力が高い」と思う教師¹⁶

- 子どもの理数系教科の能力に関して、22.8%の教員が、「理数系の教科は、男子児童生徒の方が能力が高いと思う」と回答。
- 若い教員ほど、固定的な性別役割分担意識を肯定する割合が高い傾向が見られた。

■ 女性の理数系教師がいることの影響¹⁷

- 自身を「理数系タイプ」あるいは「どちらかといえば理数系タイプ」と回答した女子中学生のうち、1科目でも女性教員から教わっている女子と、2科目ともに男性教員から教わっている女子を比較すると、それぞれ33.8%、22.5%となり、1科目でも女性教員から教わる女子の方が「理数系タイプ」と答える割合が11ポイント高い。

13 経済協力開発機構(OECD)、2015、「PISA in Focus 46 教育における男女格差の背景」

14 経済協力開発機構(OECD)、2016、「PISA results from PISA 2015 日本 結果のポイント」

15 内閣府、2019、「男女共同参画白書(令和元年度版)」

16 独立行政法人国立女性教育会館、2018、「学校教員のキャリアと生活に関する調査」

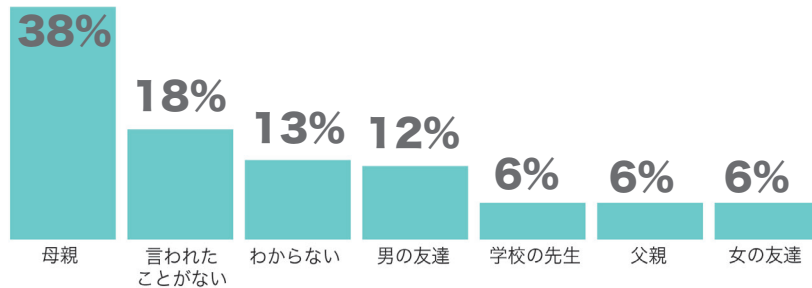
17 株式会社リベルタス・コンサルティング、2018、「女子生徒等の理工系進路選択支援に向けた生徒等の意識に関する調査研究」(内閣府委託調査)

3. 家庭とジェンダーバイアス

「男性は仕事、女性は家事」という伝統的な性別役割分担に基づく言葉がけや経験について尋ねました。

「女の子なら料理ができた方がいい」「女の子だから家の手伝いをするように」と言われることはあるか、その場合誰から言われることが多いかについて聞きました。この回答からは、先ほどの「4年制大学進学」や「理数系教科学習の必要性」からは一転し、異なる現実が見えてきます。

「女の子は料理ができたほうが良い」と誰に一番多く言われますか



「4年制大学進学」や「理数系教科学習の必要性」では「言われたことがない」と回答するのが9割で、「わからない」という回答はわずか5%でした。けれども、「女の子は料理」という質問では、母親からの影響が大きいことが見て取れます。学校の先生、父親、女友達という回答が一定数あり、男友達からは12%、わからないという回答も13%となりました。

子育てで「女の子らしさ」を要求するのは、父親よりも母親の方が少ないという調査結果(26ページ)がありますが、その傾向はここでは見られません。家事の話題になると伝統的な性別役割分担の考え方が出現し、10-12ページで紹介した少女の声に表れているように、「女の子は勉強もする、料理もする」という風に、男子に比べ女子に対する要求が多いことが見えます。

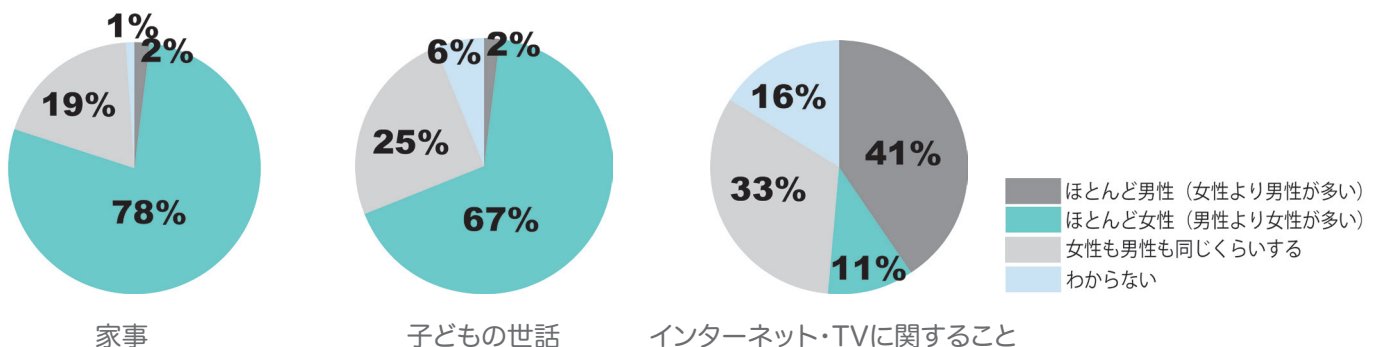


“

- ・女の子だから、という理由で兄弟間で自分だけ家事が増やされたり料理ができないと責められたりする。
- ・兄との対応が違う。姉と私は女の子なのだから、これくらい出来なくてどうするの、と。
- ・女は家事、男は仕事。だから、女は料理ができないといけない、と考えるのかも。
- ・昔から女は家事、女は家にいるもの、という考え方があって、それが親から子へと受け継がれる。
- ・男性は家を養うために仕事優先だからかな。

家事について、男女のいずれが担っているかを聞いたところ、以下のような分布になりました。少女たちが暮らしている家庭環境には、伝統的な性別役割分担があることがわかります。

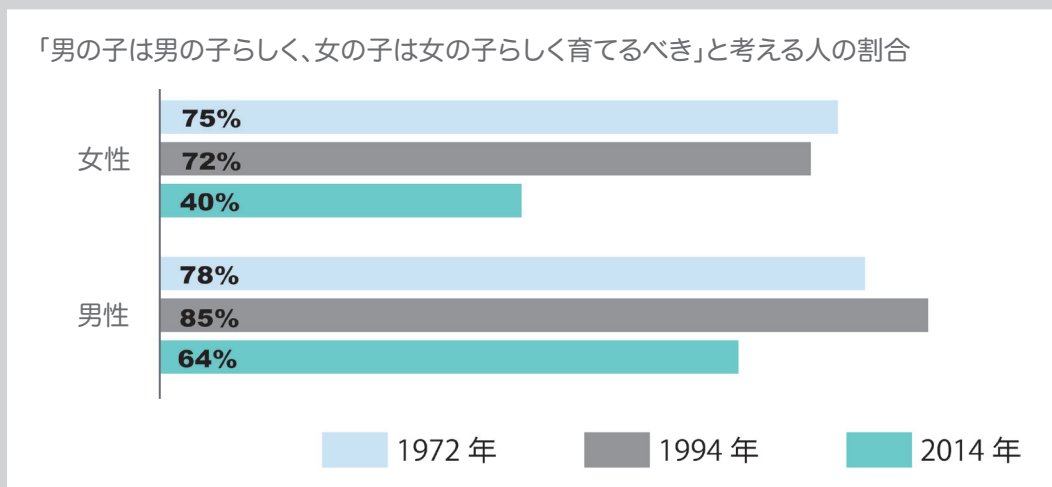
家では誰がしているか



▶ 資料

■ 男の子は男の子らしく、女の子は女の子らしく、という価値観¹⁸

- 子育てにおいて、「男の子は男の子らしく、女の子は女の子らしく育てるべき」という考え方に賛成する割合は、母親40%、父親64%と、母親の方が低くなっている。
- 子育てにおいて性別により方針を変えるという考え方は年々減少している。



■ 子どもに期待する進路¹⁸

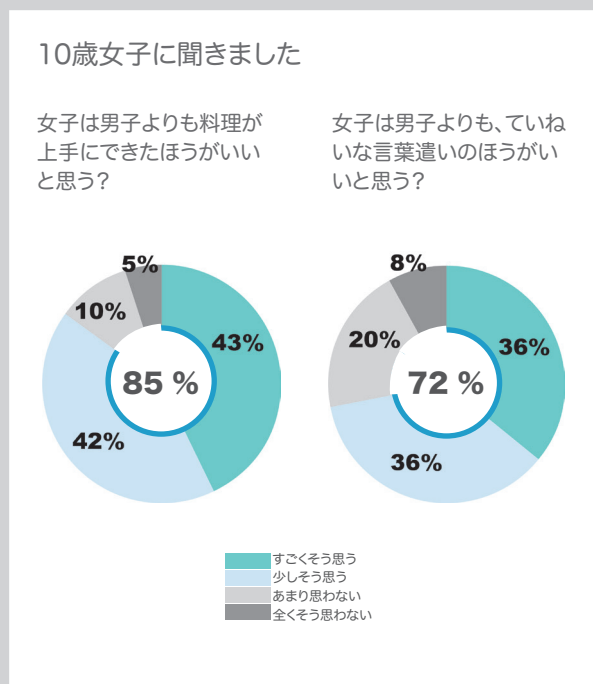
- 親が子どもに期待する進路には男女によって差がある。
- 女子には「大学まで」は56.7%、「大学院まで」が2.0%、男子の場合は「大学まで」が65.5%、「大学院まで」が3.6%と、男子には女子より高い学歴を期待している。

■ 働くことや進路選択の影響は母親から¹⁹

- 小学生及び中学生の頃、並びに大学・短大・専門学校への進学時では同性の親の影響を受けたという割合が最も多い。

■ 10歳女子のジェンダー意識²⁰

- 10歳女子の8割以上(85%)が「女子は男子よりも料理が上手に出来た方がいい」、7割以上(72%)が「女子は男子よりもていねいな言葉遣いの方がいい」、過半数(58%)が「男子は男らしく、女子は女らしくするのがいい」と思っている。
- 10歳女子の79%が「母親から『女の子らしくなさい』と言われる」と回答している。
- 母親が仕事から帰宅後忙しくしているときに、父親が夕飯の準備をしたり風呂掃除などを自ら積極的にやっている姿を幼い時から見て育つと、「男女の家事分担は当たり前だという考えが女子の中に育ってくる」と考えられている。
- 「ジェンダー意識」(例:女の子は丁寧な言葉遣いをした方がいいなどの「〇〇らしさ」と、「父親の家事参加」や「母親が仕事をしている」ことの間には特に関連が見られない。
- 女の子らしくすることを心がけている10歳女子は、幼い頃から「女の子の遊び」とされるお人形遊びやままごとなどをよくしており、母親や祖母から「女の子らしくなさい」と言われることが、ジェンダー意識の形成に影響を与えていると分析している。



¹⁸ 内閣府、2019、「男女共同参画白書(令和元年度版)」

¹⁹ 株式会社創建、2019、「多様な選択を可能にする学びに関する調査報告書」(内閣府委託調査)

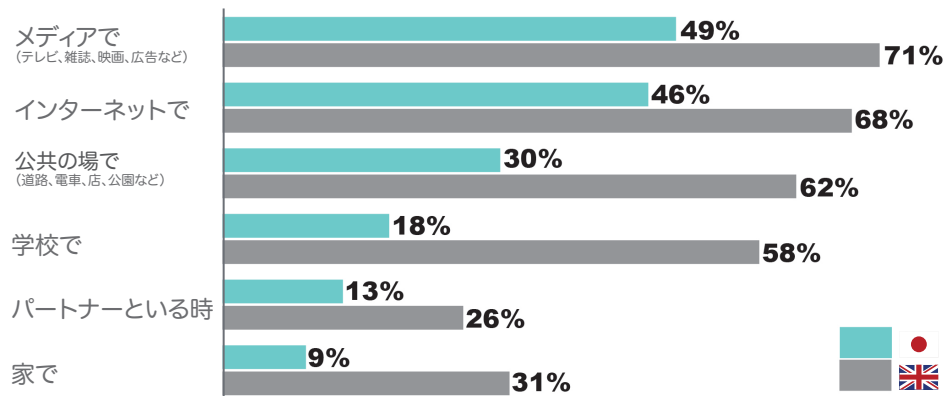
²⁰ 株式会社ワコール、2019、「10歳キラキラ白書 2019年版」

4. 日英比較 — 日英の差はどこからくるのか

今回の調査は、イギリスのガールスカウトが実施した調査 Girls Attitude Survey2018と共通の質問があります。日英の比較から、日本の少女の抱えている問題が見えてきます。

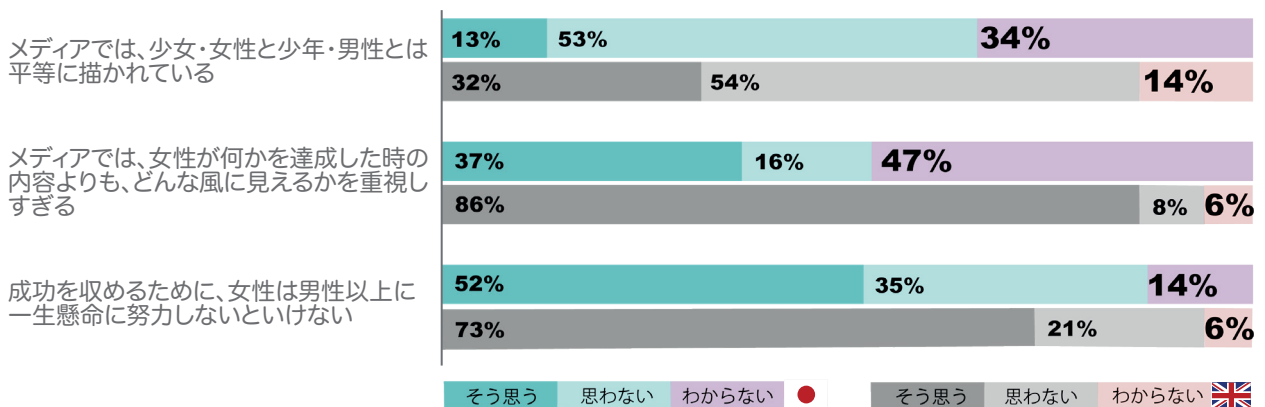
普段の生活で経験する性差別

日常の生活で性的な嫌がらせや性差別を経験する割合は、イギリスは日本の2倍から3倍以上の数字です。6割以上のイギリスの少女は、メディアやインターネット、公共の場所、学校で性差別等に接することがあると回答しています。



② 「わからない」

回答に「わからない」を選んだ割合には両国に大きな差があります。特に、「メディアでは女性が達成した内容よりも、どんな風に見えるかを重視しすぎる」という項目は、「わからない」と回答した人はイギリスでは6%ですが、日本では47%と約半数がわからないと回答しました。どの項目においても、イギリスとは大きな差があります。



前ページの2種類のグラフの比較から、二つの疑問が浮かび上がりました。

ひとつは、イギリスは、日本より性差別や性的な嫌がらせが現実が多いのか、ということ。もう一つは、なぜ日本は「わからない」と回答する割合が高いか、です。

この理由について日本の女子高校生たちの意見を紹介します。



“

- ・ 日常だから分からない？
- ・ 「疑う」がない。
- ・ ジェンダーを意識してない。
- ・ 考えたことない。
- ・ 平等に書かれていることもあるから。
- ・ 詳しく考えないから。

“

どう思うかは人それぞれかもしれない。でも、これらの質問内容が“日常の中で当たり前になってしまい、性差別だとわからずに現実を疑わない”ということです。私たちは実際に、アンケートに回答したり、今日の発表のプロジェクトに参加したことで、この項目が性差別に値するかもしれないと気づくことがあり、普段から気にする機会がないということを知りました。また、私たちもそうであるように、ジェンダー平等に対して意識をしたことがなく、深く考えたことがないという女の子が多いと考えました。

“

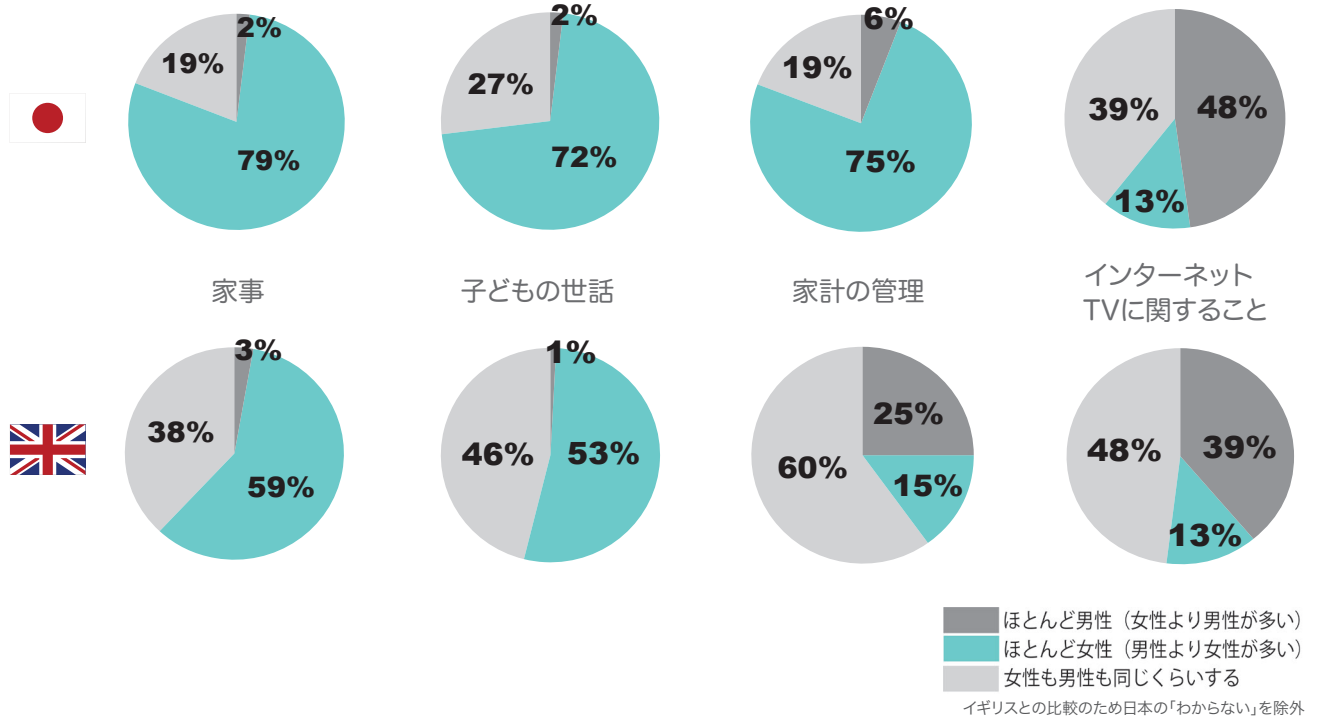
イギリスでは女性の政治や経済への参加割合が日本より高く、エリザベス女王やメイ首相(当時)、国連で女性への差別撤廃のスピーチをしたエマ・ワトソンのように、政治や国際キャンペーンで女性がリーダーを務めることもあります。逆に日本では、未だに女性総理は誕生していないし、女性が大きな組織のトップになる、ということがまだまだ珍しい社会です。そのため、イギリスでは、女性が意思決定の場に多くいたり、活躍する機会を見ることが日本より多く、日本よりも性差別について敏感で、進んだ考えを持っているのではないかと思います。日本では当たり前になっていることがイギリスでは差別に値するなど、性差別の幅が広いと思いました。

WHAT THEY'RE SAYING

家庭での家事のかかわりにも違いがある

日英での家事分担についても違いがあるようです。日本に比べてイギリスの方が「男女どちらもがする」の割合が多いことがわかります。

家では誰がしているか



イギリスでは、メディアでの少女・女性の描かれ方について疑問をもつ少女が増えている

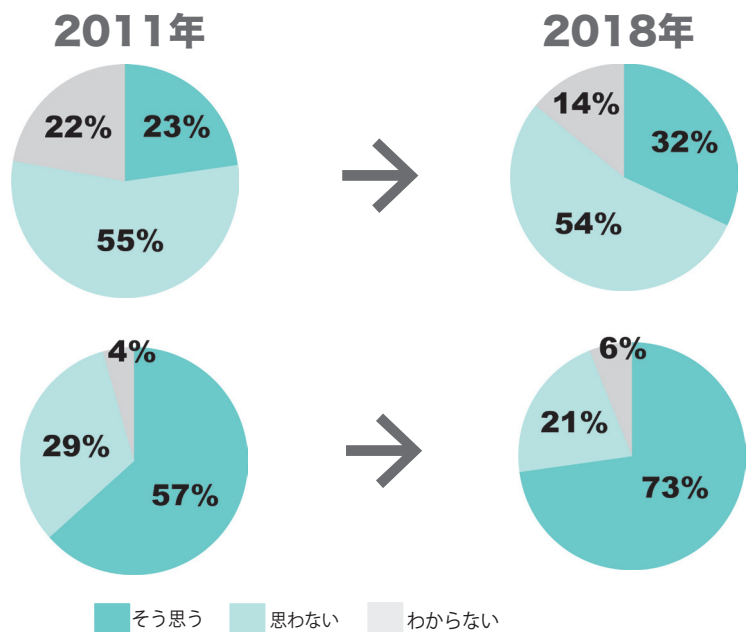
イギリスのガールスカウトは、2008年から10年間にわたり、少女や若い女性の声を聞く調査活動を幅広い項目で実施しています。

下記のグラフのように、2018年の「そう思う」の数字は2011年より増加しています。これは、社会で #MeToo のようなキャンペーンが起こったことにより、少女自身がジェンダーに対する意識が高まった一方で、少女に対する暴力が増加したとも考えることができると、イギリスのガールスカウトは分析しています。



メディアでは、少女・女性と少年・男性とは平等に描かれている

成功を収めるために、女性は男性以上に一生懸命努力しないといけない



資料

ジェンダー・ギャップ指数²¹比較

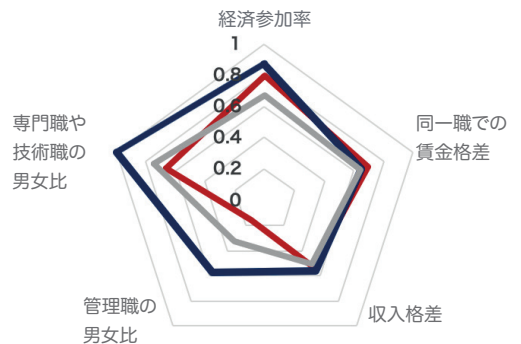
日本**110**位 イギリス**15**位
149か国中

	日本		イギリス		平均 指数
	指数	順位	指数	順位	
経済参加	0.595	117	0.705	52	0.586
経済参加率	0.799	79	0.876	51	0.669
同一職での賃金格差	0.696	45	0.654	64	0.645
収入格差	0.527	103	0.555	96	0.51
管理職の男女比	0.152	129	0.567	46	0.329
専門職や技術職の男女比	0.671	108	0.996	68	0.753
政治参加	0.081	125	0.421	11	0.223
国会議員の男女比	0.112	130	0.474	36	0.284
閣僚の男女比	0.188	89	0.444	23	0.208
過去50年間の首相の男女比	0	71	0.371	7	0.189
教育	0.994	65	0.999	38	0.949
識字率	1.000	1	1.000	1	0.882
初等教育純就学率*	1.000	1	0.999	72	0.978
中等教育純就学率*	1.000	1	1.000	1	0.967
高等教育純就学率*	0.952	103	1.000	1	0.939
総合 (149か国中の順位)	0.662	110	0.774	15	—

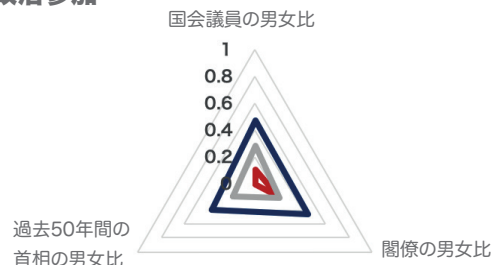
*純就学率とは、教育を受けるべき年齢の人口総数に対し、実際に教育を受けている(その年齢グループに属する)人の割合

指数は経済・政治・教育・健康の分野からなっています。
特に日本で課題が多いのは、経済・政治です。

経済参加



政治参加



— | ● | ■ | 平均

メディアにおける取り組み



日本の新聞や放送業界の女性管理職や記者は
6~20%

新聞や放送等のメディア分野における女性の参画²²

新聞・通信社の管理職	6.6%
新聞・通信社の記者	20.2%
民間放送の管理職	14.7%
NHKの管理職	8.4%



テレビ画面に映る男女の割合が半々 50:50プロジェクト²³

公共放送BBC等で、取材をするリポーター、司会者、ゲストの出演者、事例紹介などで男女半々とする取り組みが広がっている。参加チームは報道番組からスポーツや音楽番組、外部のフィナンシャル・タイムズやフィンランドの公共放送にも広がっている。この1年を通して、女性の出演比率が男性と同等以上になったところが27%から74%に増加した。BBCは、2020年までにすべての番組における女性の出演比率を50%にする公式目標を掲げている。

広告「性差に関する固定観念」禁止²⁴

イギリスの広告基準協議会(ASA)は、2019年6月から「性別に基づく有害なステレオタイプ」を使った広告を禁止した。これはテレビ、ラジオ、新聞だけでなく、インターネット広告やソーシャルメディア広告にも適用される。ASA会長は、広告内の有害な性別ステレオタイプが社会の不平等を助長し、皆がその影響を受けることや、広告表現の一部が、人々の可能性を狭める可能性があることを指摘している。

広告禁止に至る議論の過程では、イギリスのガールスカウトも積極的な役割を果たした²⁵。

21 世界経済フォーラム、2018、「グローバル・ジェンダー・ギャップ報告書2018」

22 内閣府、2019、「男女共同参画白書(令和元年版)」

23 NHK放送文化研究所、2019、「英BBC、男女の番組出演比率が同等に近づく」(「放送研究と調査」2019年7月号)掲載

24 BBC NEWS Japan、「有害な」男女のステレオタイプ描く広告、イギリスで禁止(2019年6月17日)

25 Advertising Standards Authority, 2017, 'Depictions, Perceptions and Harm A report on gender stereotypes in advertising'

5. 考察：ジェンダーバイアスを再生産するもの

6割を超える女子高校生たちが、生活全般にわたり性差別や性暴力を経験しているという事実が明らかになりました。女性であるだけで、望まない言葉がけや身体接触、暴言・差別等を受け、固定的な性役割に沿う期待をかけられ、状況によって対応が異なる扱いを経験しています。そして、ジェンダーバイアスを再生産している仕組みの存在が明確になりました。



少女の声により、学校にはジェンダーに関する**隠れたカリキュラム**が明確に存在すること、そして、それは彼女たちが可能性を発揮することを妨げていることがわかりました。時間割や教科書に含まれていなくても、例えば、教師の男女比、教師の発言や期待、能力に対する誤った認識、生徒会や授業中の分担などの場面で、性役割や性別に基づいた偏った考え方に遭遇しています。「なんとなく女子はこうしないといけないんじゃないか」「女子はこういう役割なんだ」という「価値観」を教わっています。そのように無意識にジェンダーの偏りがあるメッセージを受け取り、経験が積み重なり、教師と生徒間あるいは生徒間の相互作用により、ジェンダーバイアスは強化・再生産されています。学校は男女平等と認識しているにも関わらず、日常的に無意識に受け取るメッセージにより、彼女らは自ずと言動を枠に押し込め、自制し、新しいことに挑戦する気持ちが育たない傾向が強くなります。個人の自由意思で選択していると思われる進路選択や学校生活がすでにジェンダーバイアスがかかったものであることなどは想像できないのです。そのため、教師自身が「隠れたカリキュラム」の存在や影響力を認識することはとても大切なことです。



家庭、特に母親や祖母もまた、少女たちの価値観に影響を与えています。家庭生活でのジェンダーに基づく役割分担や女子に要求する女らしさは日常的に存在し、大人になればジャグリングのように、仕事に加え、家事・育児といくつもの役割が要求されることを悟っています。視点を変えてみれば、少女たちに性役割に基づいた発言をしたり、家庭で伝統的な性別家事分担を担う母親たちもまた、成長の過程でジェンダーバイアスのある価値観を無意識に受け取り、内在化してきたと言えます。



メディアが女性の固定的なイメージを伝えたり、女性の存在や価値を軽視するような扱いをしていることを問題視し、性差別であると少女たちが認識していることも明確になりました。メディアは意識的、無意識的に内容が構成され、ものの見方や価値観を、明示的あるいは暗示的に伝えるものですが、そういったメディアの特徴を学ぶ機会は、日本の学校教育にはほとんど存在しません。そのため、今回の調査で「メディアが性差別をおこなっている」と明確に指摘する少女がいる一方で、「**わからない**」という回答が多く寄せられました。アンケートに答えることを通して、初めて被害を受けていることや性差別の定義を考え始めた子もいます。グループインタビューに参加した高校生たちもまた、「意見交換を通してジェンダーバイアスへの気づきを得た」と言っています。仮に、性差別や性暴力の定義を明確にした資料を添付してアンケートを取ると、違った結果が出てくるかもしれません。



学校やメディアを含め**生活の中で受ける性差別**は、女子の自己肯定感や将来像に多大な影響を与えています。女子の自己肯定感の数値が男子より格段に低いことはあまり注目されませんが、そこには男女平等というあるべき姿と、実際の在り方・扱われ方から、**ダブルスタンダード**が存在することが一因となっている可能性はないでしょうか。大人の女性活躍推進政策と並行して、本調査で明らかになった少女にとっての見えないバリアを取り除けば、自己肯定感の向上につながり、より積極的に自己実現を目指す人材が増え、社会における多様性の確保に貢献すると考えられます。



今回はイギリスの調査と比較し、イギリス社会のジェンダー関連のデータや取り組みを調べる中で、イギリスを鏡として、日本の姿を映し出すことができました。日英比較で見た両国のジェンダーにおける取り組みの差は、少女たちの意識の差にも表れているようです。今後、少女たちが社会に関心を持ち、ジェンダーについて学習する機会を増やすことに加え、メディアリテラシーの力を高め、自らのジェンダー観を点検する機会を確保することは、ジェンダーバイアスの再生産を防ぐことにつながります。同時に、メディアにおける女性表現を改め、学校では隠れたカリキュラムを意識した包括的な施策の検討が求められます。そのような未来の女性活躍のための施策を一日も早く各方面で開始する必要があります。



3

健康な「木」と「森」にするために

- ・ ジェンダーバイアスがなくなる日を目指して—解決に向けた提案
- ・ 調査報告会 参加者の声
- ・ 発表者の高校生らの声



ジェンダーバイアスがなくなる日を目指して — 解決に向けた提案

調査を通して、全国的女子高校生たちは、「女の子は～」「女の子だったら～」という固定観念を受け取っていることがわかりました。そういった固定観念は少女の中に刷り込まれ、価値観に影響を与えています。女性が尊重されていないというメッセージを受け取り、性的な嫌がらせを経験したり、否定的なメッセージを受け取ると、未来を描けず、不安を感じ、自信を失い、そして挑戦することを諦めてしまいます。そのことを解決するために女子高校生たちが話し合った解決策を提案します。

企業の皆さんへ

“

女性リーダーを増やす

まず、現在リーダーの立場の男性が女性を支持し、女性もリーダーとして活動できる環境に変えることが大事です。

男女共に、子育てと仕事が両立できるようにする

「女性が子育ても家事もする」というイメージが大きく、そのことを応援することに企業は力を入れています。しかし、父親も母親も一緒に子どもを育てる環境を整え、社会や家庭においても男女の平等を目指す方向に重点を置くことが重要です。男女が共に子育てや家事をすることは、自分たちの子どもにとっても、よいロールモデルになります。いつまでも女性だけが「両立する立場」を担うのではなく、男性も仕事と家事・子育てを両立できるようになり、男女と一緒に協力している姿を子どもが見ると、そのような価値観が次の世代に引き継がれて、社会が変わっていきます。

男性と女性が平等な評価や対等な扱いを受ける

ただ女性の割合を増やせばいいのではなく、誰もが平等な評価を受け、対等な扱いを受けることが前提です。イギリスでは、女性の割合を増やしたものの、セクハラを受けて退職するということがありました。女性と一緒に働くことに慣れていない男性は、何がセクハラにあたるかわからないこともあるようで、何がセクハラなのかを明確にし、研修することが必要かもしれません。



国会議員の皆さんへ

“

女性の政治家を、本気で、強制的に増やす

2019年7月「候補者男女均等法²⁶」が成立して初めての国政選挙が実施されました。全候補者数に対する女性候補者の割合は28.1%で、前回から3.4ポイントしか変わりませんでした。法律が施行され、女性政治家を増やすことは大事とは言っても、結果を見るとあまり成果はありません。議員選挙の候補者を男女同数にするよう政党に義務づけるパリテ制度²⁷の実現に向けた運動もあるので、こういった政策の実現も検討し、早く変化を起こしてほしいです。

見えない圧力を排除する

選挙に立候補しようとしても、多くの女性は見えない圧力に阻まれることがあります。女性は家事で仕事を諦めたり、育児のために遅くまで残らなかったり、早退すると信頼を無くすかもしれない、というプレッシャーを感じています。国会がより多くの女性を受け入れ、国会議員がロールモデルになることで、女性に勇気を与え、一般社会にも変化が起きます。国会議員には、それだけ影響力があると思います。同時に、女性に対する偏見は女性自身も持っていることがあります。そのため、女性が自分に自信を持つことも大事です。なにより、国民が政治に関心を持つ、という工夫も必要です。

²⁶ 国会や地方議会の選挙で、男女の候補者の数を均等とする法律「政治分野における男女共同参画の推進に関する法律(平成30年施行)」の通称。

²⁷ フランスでは2000年に、男女の政治参画への平等を促進する法律、通称「パリテ法」が制定された。パリテとは、「同等、同一」を意味し、選挙人名簿に男女同数の候補者名を記載する、比例候補者名簿の記載順を男女混合にするなどが定められ、罰則規定もある。2008年には「議員職・公職」だけでなく「職業的・社会的な責任ある地位」もパリテの対象となっている。



諸外国の事例に学ぶ

日本ほど女性議員の割合が低い国は数えるほどしかありません。外国がすでにおこなったさまざまな改革を参考にして、この日本では何ができるかについて、もっと真剣に取り組んでほしいです。

メディアの皆さんへ

“

制作するときに、人を傷つけていないか、もっと厳重にチェックを

メディアの影響力は大きいです。例えば、女性を傷つけるシーンが毎日流されています。そのことにより、多くの女性、多くの弱者が悲しい思いを受けています。ですから、制作のときに、厳重なチェックをしてほしいです。

ジェンダーに配慮し、偏ったイメージを流さない

メディアは人の価値観をつくる、という影響力があります。例えばテレビの番組で「女性は補佐役である」との決めつけはないですか。テレビドラマやCMで、家事は母親だけがやっている場面をよく見ます。「そんな些細なこと」と考える人がいるかもしれませんが、でも、そんな些細な描写が積み重なり、青少年に少しずつジェンダーバイアスを植えつけていきます。イギリスは広告でジェンダー表現についての基準を設定しました。日本でも同様のことは目指せるのではないのでしょうか。



男女バランスよく報道する

イギリスの50:50プロジェクトのような視点を日本のメディアも取り入れて、男女バランスよく報道してください。男女がバランスよく取り上げられれば、いろんなところでよい変化が起こると思います。

学校の先生へ

“

男女を平等に扱う

今回のアンケートで、学校でいろんな刷り込みがあることがわかりました。学校生活の中では、どのことが性差別に繋がるのかわかりません。まず、先生たちに男女を平等に扱うことについて研修をして、生徒が間接的に影響を受けているものが多いことをわかってほしいです。声掛けに気を付けたり、女性の理数系の先生や校長先生を増やしてほしいです。



生徒が性差別について学ぶ機会をつくる

重い荷物を運ぶのは男子、家庭科の授業は女子が率先しておこなうなど、生徒たちの間で、性別分業が当たり前になっているのも問題です。ステレオタイプを変えていくために、性差別について考える時間が必要だと思います。

男女問わず、すべての人へ



自分の中に、固定観念がないかどうかを点検する

社会にはたくさんの性差別的なからかいがあり、82%の女子高校生が、これは男女の扱いが公平でないことと関係があると言っています。77%の人が、飲酒や服装のせい、性暴力の責任が女性にあると言われることと、男女間の不公平が関係していると言っています。このようなことは、一人ひとりの気持ちに深い関係があり、一人ひとりが取り組むことです。これまでに自分が「当たり前だと思っていること」を疑って、自分に固定観念がないかどうかを日々点検することが大事だと思います。

女性たち、そしてすべての女の子へ



声に出す

イギリスのように変化を起こしている国があります。おかしいと思うことはしっかりと声に出す、という行動を起こすことから変化は生まれると思います。

挑戦する

本当は男性も女性も関係なく家事育児などをするべきで、女性だって社会で活躍できます。私たちには気づいていないこと、見えていないこともたくさんあります。そういったものをもっと学び、私たちが大人になる頃には、すっかり変わった社会になっているように、いろんなことに挑戦していきましょう。

ガールスカウトへ



発信しよう 声を上げよう Speak out!

ガールスカウトでは、ジェンダーバイアスを減らし、少女や女性の周りにおける差別や暴力を考えるプログラムを持っています。このプログラムをもっと実施して、ガールスカウトから声を上げましょう。気づいた人が声をあげる、気づいていない友達に教える、一緒に考える、そして一緒に声を上げ、声を大きくしていきましょう。いろんな人たちとタッグを組んで世の中を変えていきましょう。



2019年6月、衆議院第一議員会館において、女子高校生調査報告会「女子高生が考える、ジェンダーバイアスがなくなる原因と解決策」を開催し、中学生から国会議員まで、約100人の参加がありました。そこで参加者から寄せられた意見を紹介します。

WHAT THEY'RE SAYING



“

解決案の一つに女性のリーダーや政治家を強制的に増やすという意見がありました。しかしながら、最終的なゴールは性別関係なく、実力でリーダーを選ぶことだと思いました。(15歳)

“

学校での教育が大切だと思います。ジェンダーバイアスが存在することそして固定観念をなくすように教育できたらいいと思います。またメディアにかかれたバイアスがあり、それによって固定観念が植え付けられていくと思うので、イギリスのように何か制限をかけるなどの施策が必要だと思いました。(16歳)

“

日本がどのような民族、国民性を持っているのかを教育プログラムに入れるべき。ハイコンテキスト文化²⁸といわれている日本には意見を言語化することが欠けている。その教育をして自らを見つめることこそ「自分から変わる」原動力となるのではないか。(16歳)

“

今の時代、メディアを第三の権力というようにメディアの影響はものすごくあると思います。テレビ、ドラマでは女性はこういう役、といった先入観が目に見えて感じるが多々あります。メディアというもので改善できるのではないかと思います。(15歳)

“

匿名化が進む中、ネットリテラシーが低く人の気持ちを考えられない人が多くなってきたと思う。判断するのは上の立場の人間が多いと思うので、そのような立場の人が考えを少しでも変えてくれるとうれしいと思う。(18歳)

“

ミクロな視点として個々人が自分の意思を相手にしっかりと伝えていくことが大切だと思います。(21歳)

“

女性だけではなく、男性もこういう活動をおこなうべき。女性だけ増やすことを考えるとそれもバイアスなので能力重視にするべきだと思う。実力で政治家が選ばれるべき。(15歳)

²⁸ ハイコンテキストとは、コミュニケーションや意思疎通を図るときに、前提となる文脈(言語や価値観、考え方など)が非常に多く、「以心伝心」のような意思伝達が行われる状況のこと。コミュニケーションの際に互いに相手の意図を察し合うことで、抽象的であいまいな表現が多い。日本の文化は、「空気を読む」などのように文脈理解が重視されるハイコンテキストな文化とされる。ハイコンテキストに対して、より言語に依存したコミュニケーション文化のことをローコンテキストという。ローコンテキストでは、直接的でわかりやすい表現を好み、言葉にしていない内容は伝わらないとされる。

院内集会の様子は、全国の新聞にとりあげられるなど関心呼びました。調査から見てきたことをきっかけに「声を上げ、社会を変えたい」と行動を起こす少女たちがいる一方、「わからない」と回答する女子高生が多く、その問題と原因にも注目されました。

女子高生6割「性的嫌がらせや性差別」経験

都内で意識調査から解決策探る

日本、「感度」に低さも

女子高生がリアルに経験している
ジェンダーバイアスの実態と疑問

GS調査「声上げ、社会変えよう」

「固定観念ないか点検」



男女平等建前と裏腹の社会

女子高生6割
性差別を実感

性的な嫌がらせや差別
女子高生6割超直面



<掲載紙一部紹介>

・東京スポーツ新聞 2019.6.19

女子高生がリアルに経験しているジェンダーバイアスの実態と疑問

・東京新聞 2019.6.20

女子高生の6割「性的嫌がらせや性差別」経験

・教育新聞 2019.6.24

女子高生の6割、性差別を経験「自己肯定感に関わる」

・京都新聞 2019.7.13

男女平等 建前と裏腹の社会 英より低いメディアリテラシー 関心と実態知る経験足りず

・静岡新聞 2019.7.23

女子高生の6割性差別を実感

その他多数掲載



“

大学の進学についての話では、アンケートの段階では「今どきそんなこと言う人いるのかな？周りの友達みんな大学行くし…」と思っていましたが、地方ではまだまだ女の子は行く必要ないなどの伝統的な考え方が残ってしまっていたことを知りました。

私たちと同世代の子たちが普通になりたいもの、やりたいことができる環境になって欲しいし、女性が男性より何倍も努力しないといけないのはおかしいと思います。(17歳)

“

一番はやはり、性差別が当たり前になっていて、日本人の古い考え方が未だに強く根付いているために、女性自身、ましてや男性は気づかないことが問題だと思います。(17歳)

“

普段当たり前だと思っていることにも男女の不平等が隠れているのだと改めて感じました。日本では、女の子が活躍できる場所が少ないし、女性差別に対する意識が低いなと思いました。(17歳)

“

親の世代と私とでは、例えばLGBTのことでも意見が違って、世代によって感じ方が違うのだということを感じました。私たちの世代からでもそういった性別の問題を個性だと言えるようになったらいいなと思いました。(17歳)

“

私たちが、男女の差は仕方の無いことだと思ってしまっていたのですが、同世代の子とジェンダーについて話し合うという場を設けてもらったことで、たくさんの意見や考えに触れることができ、自分たちにも出来ることがあるのではないかと考えが変わりました。(17歳)

“

私たちが、今回のアンケートや発表の準備をする中で、とても多くのことに気づきました。(15歳)

“

調査に参加するまでは、「性差別」は何か特別なものだと思っていたが、私たちの普段の生活や身の回りでも誰もが経験したりするかもしれない問題だと知った。今まで声をあげたかったけどあげられなかった女性はたくさんいることも知り、私たちの発表がきっかけになって、1人でも多くの人に知ってもらい、行動を起こしてもらおうことの大切さを学んだ。(18歳)

“

女性が活躍するために、自由に生きられるようにするためにはまだまだ時間がかかることがわかった。それに対して私たち中高生がどれだけ関心を持ち、自ら働きかけられるかがこれからの日本のあり方を決めるのではないかと考えた。(17歳)

WHAT THEY'RE SAYING



あしがき

今回の調査は「みんなの声で社会を変えよう」とウェブで呼びかけ、実施しました。その結果、500人を超える女子高校生がそれに応じてくれました。この調査に協力していくなかで「今まで考えたこともなかった」や「差別に気づいた」という声もありました。同時に、自分たちの感じていることを社会に届けことが社会を変える一歩になる」ということに気づいてもらえたと考えています。声を届けてくれた一人は次のように言っています。

“

私たちの世代が、今、この問題に取り組めば、価値観は変わっていく。10年後、20年後の私たちが大人になった時には、今当たり前にある価値観は、もう当たり前ではなくなる。そうすると、その時にすでに時代は変わっているということになる。そのためには、今、一緒に声をあげる、そして、行動を起こすことがとても大切だ。（18歳）

日本のガールスカウトは、すべての少女・女性がジェンダーバイアスやバリアを感じることなく、自らの可能性を存分に発揮できる社会構築に向けて、積極的に働きかけていきます。最後に、この調査に協力していただいた女子高校生の皆さん、発表の機会を与えてくださった方々、そして発表を聞きご意見くださったすべての方に感謝申し上げます。

2019年10月

公益社団法人ガールスカウト日本連盟
Stop the Violence委員会 調査担当チーム
河合千尋
片岡麻里
篠宮さおり

参考文献

Girlguiding, Girls Attitudes Survey 2018
天野正子、木村涼子(編著) (2003) ジェンダーで学ぶ教育 (世界思想社)
河野銀子、藤田由美子(編著) (2018) 新版教育社会とジェンダー(学文社)
木村涼子、古久保さくら(編著) (2008) ジェンダーで考える教育の現在 フェミニズム教育学をめざして (解放出版社)
千代田区 (2016) 千代田区男女共同参画等についての アンケート調査 青少年向け 平成28年
富士市 (2019) 平成30年度富士市男女共同参画に関する生活意識実態調査 中学生対象 報告書
久慈市 (2014) 久慈市男女共同参画に関する意識調査(中学生・高校生)平成25年

ガールスカウト 活動基本方針

ガールスカウトは
少女と女性の視点に立って、より幸せな社会と未来の実現を目指し、
リーダーシップを発揮できる人材を育成するとともに、
社会に変化をもたらすチェンジエージェントとして行動します。

ガールスカウトは自らが行動していく運動です。日本では100年前から「自分で考え、行動できる女性」を育てるノンフォーマル教育に取り組んできました。ガールスカウトの少女たちは、人との関わりを通して、さまざまな役割と活動を経験していく中で、豊かな人間性を身につけていきます。そして、自分の人生を自分で切り拓く力をもった女性に育っています。

私たちのこれからの挑戦は「女性とその可能性を最大限に発揮できる社会環境をつくりあげていく」ことです。そのために、少女と女性の可能性を伸ばすことを妨げる問題に対して声をあげ、社会に変化をもたらす行動を積極的におこない、貢献していきます。

Stop the Violence キャンペーンについて

2011年以降世界のガールスカウトは、少女・女性に対する差別・暴力根絶に向けたStop the Violenceキャンペーンを展開しています。

日本ではデートDVの啓発活動や教育プログラムに始まり、2015年以降はジェンダーの不平等に起因する性差別や性暴力についての教育プログラムを全国に広げています。その中で多くの少女・女性がジェンダーの課題を自分ごととして取り組み、人を巻き込む活動を始めています。





わたしが変わる。
未来が変わる。

girl scouts



発行：公益社団法人ガールスカウト日本連盟

〒151-0066 東京都渋谷区西原1丁目40番3号

<https://www.girlscout.or.jp>

この資料に関するお問い合わせ stv@girlscout.or.jp

2019年10月 発行

定価800円+税